
ミューズゼロ 《読みにくい方はフレイムファンタジーを見て下さい》

望月シオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミコーズゼロ 『読みにくい方はフレイムファンタジーを見て下さい』

【ZPDF】

Z2575E

【作者名】

望月シオン

【あらすじ】

宇宙の果てにある…もう一つの命の星の物語

その世界の成り立ち

はるか宇宙の彼方に… もう一つの太陽系がある…。
カナンとよばれる恒星のまわりには…

炎の星テジヤスをはじめ… 金の星アッタル。海の星エル。風の星エ
トランゼ。土色の星プリティア。氷の星アパス。

そしてヨハニの星ラグナロクと7つの惑星が存在した…。
その中の一つである海の星アクアマリン…

私達の世界の月と同等の大きさである… この命の星から、すべての
物語が始まる…

三十億年前…
隕石の衝突で生まれたこの星は、二十億年前…

大量の雨で海を誕生させた…

○
生命の「嘗み」は、ゆっくりと流れ… 十億年前に海の中で生まれた植物
は… やがて地上にも生まれるようになり
三億年前… 霊虫と呼ばれる始まりの虫が、この地に姿を見せる。
そのあと靈虫は、長い時間をかけて進化し…
一億年前… ハンショント＝インセプターと呼ばれる虫達が生まれ…
現在の生態系の元となつた…。
そして…
○

それから進化した魚類や両生類が生まれる中…
そこから海蛇の一種として、始祖竜と呼ばれる手足の無い竜へと進
化する者も現れ…

そこから生まれた地竜、海竜、翼竜が三界を支配し… 竜達の時代が
始まった

○
それが竜の文明の始まりである…

そして一億年前…進化を続けて、脳を発達させた事で死を理解した竜達は、

それから…生の先に死がある事を知り…

死から逃れようと集団で知恵を出し合つよつとなる…

そして竜達はやがて…ある1匹の子供の竜に、それらで得た知恵をそそぎこみ…その竜が大人になり成竜となると、自分達の長へと奉まりあげた…

竜王の誕生である

それから竜王は、2代～3代～と長い時間をかけて進化していく中で…

死は逃れる事はできないが意思は永遠に残せるかもしれないと考えるようになる…。

そして…その知恵がやがて魔法を生み出し…竜王は、その頃にはもう賢くなつていた竜達にその術を伝えた…

そしてそれが魔法文明の始まりでもあった…

意思が世界に強く影響するこの世界で魔法の存在を知つた竜達の文明は、栄華を極めるが…

6500万年前に起こつたメテオと呼ばれる隕石群の襲来が原因で、突然終わりを迎えた…。

しかし魔法の力でメテオを予知していた当時の竜王は、絶滅を避ける為に自分の子供を地中深くに封印し…長い眠りにつかせた…

そしてそれから千年後…

眠りについた子供の竜は、竜王の魔法のおかげで生き残り…長い眠りから覚めると…しばらくは仲間の姿を捜していたが…

見つかるのは小さな動物の姿ばかりだった。

そして… 賢かつた最後の竜は、そこで他の竜達がもう存在しない事を知り…

せめて自分達が積み重ねてきた知恵の証を残そうと… 土や石、あるいは、石板などに多くの文字を刻んだ…

そしてその竜は、猿の祖先である… ほ乳類の動物に可能性を感じて… 魔法で自分達が積み重ねてきた竜の知恵を… その動物に継承させた。たとえ今は理解できなくても… いつかこの記憶を呼び覚ます者が現れるだろうと… 遺伝子の中に情報を残したのである…。

そして… そのほ乳類の子孫である猿人達の中に覚醒者と呼ばれる者達が現れ…

250万年前頃から… 類人猿の中に炎を操る術をもつ者が増え始めた…。

それから魔法の片鱗へんりんを見せはじめた人類は… それから風や水… あるいは、大地の力をも操る術を発見すると… そこからさらに200万年もの長い時間をかけて… それを魔法の源流へと進化させた…。

第二期魔法文明の始まりである

それから… エンシェントマジックと呼ばれる古代魔法を生み出した人類は、

その頃から… 最後の竜が土や石などに書いて残した文字や記号の事を知り…

最初はそれを読み解けなかつたが… 子供あるいは、その孫へと進化をするたびに脳が発達していく事で… それを読み解いていく…

そして15万年前に現れた旧人達は死の存在を知つた…

それから死を知つた事で… 終わりがあるという事実を恐れた旧人達

は、集会などを開き…

そこから逃れるためには、どうしたらしいのかと知恵を出し合い…
死を越えた存在を想像する事で、死への恐怖から解放された…

神の誕生である

そして五万年前…

限りなく現代人に近い姿となつた旧人達は、カドモンと呼ばれる男
を…神に選ばれた者として自分達のリーダーとした

。世界最初の王の誕生である。

そして、その頃から人々は、死を逃れるための力を魔法に求め始め
…神に近づこうと様々《さまざま》な魔術を生み出したのである…

。それが第三期…近代魔法文明の幕開けである

。それから…

魔法によるさらなる発展を求めた人類は…自然をも変えてしまつほ
どの強大な力を手にするのだが…

。そのために人々は、傲慢まくわんになり…

。その歪ゆがんだ心が魔法をも狂わせるようになる…。

そして…彼らの暴走した魔法のせいで、人々の中の人ではない者
へ姿を変える者が現れた…

。かつての人々は、その怪物達をケムダーと呼んだ

。そして欲望にのみこまれてケムダーとなつた人達は、怪物の姿にな
らずに…ずっと人のままでいる善人達を妬ねたんでは、次々と殺してい
き…

。そしてそれが原因となり…とうとう人々とケムダー達の戦争が始ま
った。

そして・・・

その戦争によつて、もたらされる混乱や絶望は…人々にさらなる怒りや悲しみをもたらした…

終わることなくぶつかり合う魔法は、天地を狂わせるほどにすさまじく…

そのせいでの世界中に地震や津波が多発するようになり…

そして、それらの事が原因で起こった惨事は…当時の魔法にかかわりをもつ者達をすべて絶滅させたといわれている…

。それは後の人々にメギドラの災厄と呼ばれた。

そして・・・

14000年前に起こったといわれるその大災害で…人類は滅亡したかに思われた…

しかし当時…辺境の地で魔法を知らずに育つた人々が生き残り…現在に生きている人達の祖先となつたのである

。・・・・・

その世界の成り立ち（後書き）

今まで見ていた読者の方、今まで執筆できなくて・・・「めんなさい」。新作は、6月までに何とか間に合わせたいと思います。

第1話【「ボルトになつた少年】 Aパート

はるか宇宙の彼方にアクアマリンといつ海の星がある…

月と同じくらいの大きさのその星は、私達の地球と同じよつに入々が中心となつて生活をしていた…。

その中の南西の国ジャンボ…

私達の世界でのアフリカのガーナに位置する…このジャンボといつ国の中に番犬族と呼ばれる狩猟民族の村がある…

リカオンの村

昔ながらの木造建築が並ぶこの家にココホレの家がある。

天井が3メートルくらいしかなく…周囲が10メートル四方しかないこの家に父親と子供が一人で生活していた…

父親の名前は、マテ。

百六十センチくらいの身長で…坊主^{ぼうず}と呼ばれる髪の無い頭をした男だ。

狩猟民族の衣装を着たこの男は、かつて貿易商人の付き人として世界中を旅していた…。

子供の名前はポチ。

父親と同じような坊主頭と衣装を着た身長約1メートルの父親を小さくしたような少年である…

そんなマテとポチは家の中で、木で出来たテーブルをはさんで向かい合ひながら何やら話をしていた。

マテ

「そこで私は、^{ひぐま}熊をあそこに^か掛けてある槍で倒し彼の危機を救つたん

。だ…

自慢氣に話す父に…ポチは両手を輝かせながら

「それで父さんとその人は友達になつたんだね…」

。そう話すとマテは、

「そうだ…」

…と遠くを見つめるよつた田で、過去の日々《ひび》を思い出しながら

「そのあと私と彼は、いろんな話しをしているうちに、すつかり意氣投合して親交を深めたんだ…。」

だが当時の私は貿易商人の付き人をしていたので…

。取引が終われば商人達と一緒にその地を去らねばならなかつた…」

。テーブルの向かい側の席に座るポチに、そんなことを話すと

「でも手紙のやりとりは

今もしてるんでしょ。」

ぼく知つてるよ…と話すポチにマテは

「そうだな…」

…と、うなづいたあと

「彼と別れる時に住所が書かれた小さな紙をもらつてな…

あの時は、世界中を旅していったから、どうしようと思つたが…この村に定住した事で、彼と手紙のやりとりが出来るよつになつたんだ

。」

そう言つて、それを聞いたポチが、

「そうかあ…

いいなあ…ぼくもいつかジパングに行つてみたいなあ…」

まだ見ぬ東洋の国を想像していると…

突然テーブルの向かいの方に座つていたマテが

「行つてみたいか？」

と突然ポチに聞いてきたので

「うん。行く行く！」

とポチが元気良く返事をすると…マテは、

「そうか…」

と席から立ち上がりながら家の隅の方まで行つて…
藁の下に隠していたジパング行きの船に乗るために必要な一枚の券と…

一緒に置いてあつた数枚の写真を右手に取つて、持つて来ると…
それらをテーブルの上に置いてから席に座つたので…

テーブルに置かれたその数枚の写真をポチが、

「わあ…」

と両手を使つて一枚一枚眺めると…

どの写真にもマテと先ほど話に出てきたジパング人が写つていた…。

そして向かいの席で写真を眺めるポチを見ながらマテが

「何もかもが懐しい思い出だ…」

つぶやくと…突然！外の方から

「ギャアアアー！」

…という悲鳴が聞こえてきたので…ポチが、

「父ちゃん…」

心配そうに声をかけると…マテは、

「大丈夫だ…」

なだめるようにポチに声をかけてから…スッと、席から立ち上がりつてから…
先ほどの航海じかいかいするための券や数枚の写真がが置いてあつた場所の方まで行くと

そこには、そこにかけてある先端せんたんにとがつた黒曜石こくようせきがついた木製の槍を右手に持つてから…ポチに

「お前は、ここにいる」

…と声をかけて、家の外に出るのだった。

『つづく…』

第1話【「ボルトになつた少年】 Bパート

マテが外へ出ると…

一步踏み出そうとする彼の足に

「！」…「これは…」

炎上する村の家が何件も映る…

だが災厄は、それだけではなかつた

「きやあああーー！」

「助けてくれええーー！」

村の女性や男達が叫び声をあげながら逃げまわつている…
その中から村の民族衣装を着た褐色の肌の男が

「マテさん！」

…と叫びながらマテの方に近づいてくるのでマテが

「シコワシコワカ！」

一体どうした！何があつた！？

状況を把握しようとしたその男に聞いてみると…その男は

「男が…男が突然現れて村の人達を！」

その続きを言おうとした時突然！ボツと

「ギャアアアー！」

「ギヤアアアー！」

その村人の男の全身が炎に包まれる。

それを見て

「シユワシユワアーー。」

マテが炎に身体を焼きつゝされるその村人の名前を叫ぶと

？？？

「おやおや……元気の良い声が聞こえてくるねえ……」

どこから誰かの声が聞こえてくる…

それを聞いたマテが、

（まさか？）

その声が聞こえる方向へ走ると……そこには肌を露出するような派手な服装をした美しい青年の姿があった

少し長いオレンジ色の髪に青い瞳をしたその青年は、一見女性とみまじうばかりの美青年だが……

その青年には、どこか妖しげな雰囲気がただよっていた……。

18歳くらいに見えるその青年の姿にマテは

「貴様人間ではないな」

。 その姿の中に別の影を見ていた。

そして……マテのその言葉を聞いた美青年は、ニヤリと微笑みを浮かべながら

「ほう……よくわかったね。君の推察通り僕は、レッサー・モンと呼ばれる悪魔の分身を……」

。 皿うの正体を告げる。

みすか

そんな美青年の姿をした悪魔を前にマテは

「なぜ人間の姿をしている！？」

両手で握りしめた木の槍を構えるマテの問いに…美しい青年は
「僕達悪魔はこの世界では実体では存在できない者なんですね。
こうして波長の合つ人間の身体を支配する事で、この地に存在でき
るようになつてているのさ…」

いわばこの肉体に寄生してゐる訳だよ…と説明して、それを聞いたマ
テが

「では、その姿の本当の主は？」

…という問いに美しい青年は興味きょうみがあるのかい？と微笑み

「金持ちの夫人と不倫していた貴族の息子…
夢の中で夫人の姿に化けたら、あっさりと墮ちてくれたよ。
道ならぬ恋の果てに悪魔にとり憑かれるなんて…不幸だよね。この
人も…」

そう言つたあとで、ハハハハハ！と笑い声をあげるので…怒りに震
えたマテが

「クズが…」

はき捨てるよつて言葉の言葉など意に介さずに美青年は

「まあ僕は、こんなカスみたいな奴の身体より…君みたいな強そ
な人の身体の方がほしかったんだけどね…」

残念そうに言つので、それで…

「だから、この村を襲つたのか！」

怒るマテの言葉に美しい青年は、

「やうじやないよ。」

と首を何回か横にふつてから

「僕達は、波長の命う人間しか乗つとる事しかできない。だから誰にでも自由にとり憑ける訳ではないんだよ。」

そう言うので…

「だつたら、なぜ！」

こんな事をするんだー」と苛立つマテに美しい青年は

「気にいらないからかな？」

マテ

「なに！？」

美青年

「君達番犬族は、自分よりも相手を大事にする偽善者が多いし…古くさい秩序や文化にどこまでも忠実なこの都合主義の民族だ。それって時代遅れなんだよね。」

冷たい目で見ながらマテ達の部族を非難し…さらに

「番犬族は三日の恩を忘れない？ヘドができるよ。人間は、もつと自由で欲望に忠実なはずだろ」

「貴様…」

怒りをグッとこらえるマテをさらに挑発するように美しい青年は

「このままどんどん人が欲望にのみこまれていけば、やがてかつての魔法文明のようにケムダ〈貪欲なる者〉に変わる者が出てくる…だから僕は、現在の時代にそぐわない君達のよつた偽善者を殺しているのや…」

そう言つたあとで高らかに笑う青年の姿に耐えられなくなつたマテは、両手から右手に持ちかえた槍を槍投げのように右肩の上までもつていき

「キサマアアアー！」

そのまま槍投げのフォームで青年に向かつて、ブンーと投げる

。そしてマテが投げた槍は、美青年を貫いたかに見えた。しかしそれは美青年の胸のところをスルリと通り抜け…そのはるかうしろの大地に槍の先端が突き刺さる。

それを見て…

「こ…これは、一体？」

呆然とするマテの背後から…何者ががブスリとマテの心臓に剣を突き刺した…

。そして…

「か…かはつ…」

心臓を貫かれたマテの左胸から赤い血が、ツワー…と下の身体をつたつて、地面の方へ流れ落ちる…

美しい青年

「さつ ものは…ビジョン《幻影》つていう魔法なんだ。
くくつ…す」こでしょ」

うじりから剣を突き刺したオレンジ色の髪の青年の声が聞こえる中…
マテは薄れゆく意識の中で…

（ポチ…）

子供の名を呼びながら膝からひざあらひササッと前の方に倒れた

そしてコロホレの家の中では…

「父さん？」

マテが最後に発した心の声は、テーブルの前で座つて待つポチの方へ直感という形で届いていた…

それでポチはガタッと、いても立つてもいられず…席を立て、家の外へ飛び出すと…

ポチの目に…やがて燃える家…灰になつた人々と…様々《さまでま》な災厄が映り始めた

その悲惨な光景は、子供の心には、耐えられず

「うあ…うあああん…」

思わず泣き出してしまつたポチは

「父さん…父さん…」

涙で濡れる目で父親の姿を求め、さまよいながらただ歩いていると…やがてポチの目に…うつぶせて倒れているマテの姿が映りはじめる

「父さん？」

泣き叫ぶのを止めてマテに近づくポチに

「おや？ まだ子供が残っていたんだ…」

刃^{やいば}が赤い血で濡れている剣を右手に持った美しい青年が声をかける。
その少し長めのオレンジ色の髪の美青年に見られている事に気づいた
ポチは、

「あ…あ…」

その青年から放たれる邪悪な気配を感じとったせいか…
恐怖で声がない…。

そんなポチをあざ笑うかのよつて美しい青年は
「フーン…君のお父さんなんだ」の

血の海にひた伏せて倒れているマテを見て

「どうしようかなー

このままあとを追わせて殺すのも良いけど…」

どうしてほしい…と…再び恐怖で身体が硬直しているポチの方に視
線を戻し…

そしてそのあと美青年は

「そうだ」

何か思いついたように一步も動けないポチをジックと見つめ…そして

ポチ

(あれ?)

それから少し時間が経つにつれ… いつの間にかポチの身体がザワザワと毛深くなり… 鼻や口がだんだんとつきだしていく…

やがて… ポチの耳の位置が上方にずれて… 頸^{あい}が人間ではないものの形へと変化していた…。

そんなポチの変化を美しい青年は、得意氣な顔^{とくじけ}で見下ろして

「君は、これから『ボルト』として生きていくんだ。

ああ そうそう…

おどき話じやなくて現実だから… 元に戻る方法なんてないよ」

どうしても元に戻りたければ死ぬしかないね … と高らかに笑う。するとポチは、

「あ…う…」

悪夢としか言^いこないのない変化に耐えられず…

父親と同じように膝からくずれおちてドサッ… と前方に倒れた

うつ伏せに倒れたポチを見て、オシャレなブーツをはいた美しい青年は

「君はこれからその姿のせいで… もがき苦しみ絶望の中で生きていくんだよ」

再び目覚めた時が本当の地獄^{じごく}の始まりだよ と言い残し… その場所を去つていいくのだった…

《第2話へ続く…》

第1話【コボルトになつた少年】Bパート（後書き）

悪魔の呪われた力によつてコボルトになつたポチは、希望を求めてジパングへ旅立つ。
しかしそこで待つていたのは、過酷な現実だった。
。 次回第2話「理想と現実のはざまで」
。 悪意のある嘘は人を滅ぼす…

第2話【理想と現実のはざまで】アパート

それから次の日になつて…狩猟民族の衣装を着たまま草むらにひつ伏せて倒れていた。ポチの鼻が、いつの間にか何かが焦げた二オイやなまぐさ生臭いにおいて充满していた…。

（何だらう？ ちくへくさこけど…）

それに鼻の感覚がいつもと違つてゐる…。

そしてポチは

「やうだ！ 確か昨日…」

父親を殺した美青年に「ボルトにされてしまつた事を思い出し両手を地面についてうつ伏せていた状態から起き上がって…

（あれ？ 田が悪くなつたのかな…）

？

視界をはじめ…様々な感覚がいつもと違つてゐる事に気づく…

そんな状態の中…ポチは、血の臭いをにじませる父の死体らしきものを見つけて…

両手を地面について、うつ伏せになつてゐるその死体につぶやく…

「ぼく…「ボルトになつちゃつたよ。父さん…」

立ち上がりつて見る視点が低くなつてゐる事から…びつやら身長も縮ちぢむてしまつたらしく…

(「これからどうすれば良いのかな…。」)

…と途方にくれるポチの前にやがて…

「おー！陰口！
かげぐち

「コボルトだ！コボルトがいるぜ！」

足に黒い革製の靴をはいた一人の男が近づいて来る

陰口と呼ばれた男の方は、少し長い髪を金髪に染めた二十歳くらいの男だ。

の男で

背中の方に黒い墨のよつなもので東洋の龍が描かれた黄色いシャツを着ていた…

胸のところに墨のよつたもので虎が描かれた白いシャツを着ていて、
陰口とこの隣の町と同じくらこの歳に見える。

「ねえ君！村がだいぶ火災の被害にあつたようだけど…何かあつたのか？」

…と聞いてきたが…ポチには彼が何を話しているのか分からず

* * ?]

…といつふうにしか聞きこえなかつたので…
それが相手に伝わつたのか…軽口が

「もしかして…言葉が通じてないのか？」

…と気づいて、そしてそれまで様子を軽口の隣から見ていた陰口が

「「ボルトじゃなくても違う国の人達にジパンングの言葉が通じるわけないだろ？…」

…とジパンングの言葉で言つてからポチの方を見て、

今度はポチ達が使う言葉で…

「オレ達は、ジパンングから来たジパンング人だ」

。 そう言つと…ポチが、

「ジパンング人！」

…と興味深げに金髪に髪を染めた陰口の方を見上げてきたので…陰口は、

「通じたようだな…」

「ヤリと笑つたあと…ポチに

「村の家がたくさん焼けているようだけど…
一体何があつたんだ？」

村に何があつたのか？と聞いてきたので…ポチは、
「実は…」

…と村に悪魔にとり憑かれた青年がやつて来た事や…その青年に父
親が殺されてしまった事などを話し

「だからこれから父さんにもらつた航海券でジパンングに行きたかつ
たんだけど…」

… そう言つてからポチは、背中に墨で龍が描かれた黄色いシャツを着
た陰口に

「あの…ジパンングって、ビリビリといひなんですか？」

ジパンングの事についてたずねると…

背の高さが一百七十センチくらいの陰口は、
「ニヤツ…と一瞬笑つてから…真顔で

「素晴らしい場所だよ。

君みたいな亞人種も平等に暮らせるまことに理想郷だ…」

そう言つので…ポチは、

「本当ですか！」

嬉しそうな顔で聞いてくるので、陰口は、

「本当だとも…

だからオレも早く帰りたいんだが…実は航海券は一枚しかないんだ

だから君の家にある航海券の一つをもらつたらひょいと良いくんだけ
どな…」

そう話し…それを聞いたポチが

「そんなのお安い」用ですよ！

待つててください…今もつてくるから…」

そう言つて、家の方に向かつて走ると…

それを見届けた革製のブーツを履いた陰口は、
一瞬、ニヤリと笑つてから真顔で

「ありがとう…じゃあ頼むよ…」

…と少し大きな声で遠ざかるポチの背中を見送るので…彼の隣にいる軽口が、

「なあ陰口…

もつもつと「ボルトのガキとなに話してたんだ？」

…と陰口に聞くと…陰口は、

「 なあ に

あのガキがジパングの事を聞きたいっていつていうから…

お前みたいな犬つこりでも平等に暮らせる国だと答えてやつたのを…

そうしたらあのガキ喜んで券をとりに家に戻りやがつた

。

おかげで券一枚の旅費が儲かつたぜ…と笑みを浮かべるので…

長めの髪を茶色く染めた軽口が

：

「 バカ！お前ジパングは、昔から…つて！

その前に力ネはどうすんだよ！

力ネがなきやあの「ボルトのガキ

ジパングで生活できないしここにも戻れねーぞ…」

。 そう陰口に言つと…陰口が、

「 つるせえな！そんな事俺が知るか！

だま 騞された方が悪いんだよ！」

。

そり叫んだせいで軽口は

、

「 うわつ逆ギレかよ…」

、

あきれて…それ以上追求するのを止めたので…陰口は、今度は楽し
そうな顔で

：

「 ハツハツハ！おもしれーよな！

何も知らぬ一ガキや年寄りを騙すのは…」

。

そり言つて、またハツハツハ！と高笑いをあげるのだった…。

一方そんな事とは、知らずにポチは自分の家に向かつて走っていた
が…

人間だつた頃とは身体の使い勝手が違うせいか…
走る途中でドスンと前の方に何度も倒れてしまつ…

（でも…何だか身体が軽いや…）

そのうちポチは身体に慣なれば慣れるほど…フワリとした感覚が自分の中で広がつている事に気づき…

そうやつて自分の身体と悪戦苦闘していくうちに…やがて…自分の家らしきものが映りはじめたので…さらに家の間近まで近づいてから立ち止まる…

「…」

「…」

もぢろん人間の時とは見えている光景が違つたために
かくじゅう
確認はないが…

（でも…ここが自分の家だつて感じがする…）

それが本当かどうか…その家の中に入つてから…自分の鼻を使って確認すると

「クンクン…うん。この匂いだ…」

。

確かにそこは、ポチとマテが住んでいた家だつたと確信するのだった。

そして…

。

（「ボルトになつたせいかな？

なんだか家の中がすゞく懐かしい気がする…）

そんな事を感じながらポチは、テーブルの方に進んでこな

「うへんと…シャシンとコーカイケンは?

あつた…あつた…」

椅子に座つてから数枚の写真と一枚の航海券をその手に取ると…少しのあいだ父親との思い出にひたつてみる…

「父さん…」

つい昨日の事なのに今思つと…ずいぶん昔の事ようつ感じられた…。両手にとつた写真に映る若い頃の父親の顔をポチは、思い出の中の父の姿と重ねて

「父さん…ぼくジパングに行くよ…。」

行けば何かが変わるかも知れない…

何も知らない子供にとって見知らぬ国は、まるでおどろ話に出でくるような魅力的な世界に感じられた…

「だから一緒にいづ…父さん…」

ポチは右手に取つた一枚の写真に映る父親にそつ語りかけると…ガタツと…椅子から立ち上がり…その写真と2枚の航海券を右手に持つて…

扉の向こうにある外の世界へと一步足を踏み出す…

そしてポチは、それから少し歩いたあと…立ち止まり空を見上げた

「やつぱつ空が白く見えるなあ…」

ポチがコボルトになつてから両目が大きくなつたものの…実は、その視界は退化していた…。

世界がセピア色にしか映らないし…その上その目から映る映像も人間だつた頃と比べると…ボンヤリとしか映らない…。

（でも耳や鼻は、前より良くなつてゐるから…ジパングの人と話が出来たわけだけ…）

ポチの現在の視界を人に例えて説明すれば…

近眼の人が白黒の映像でしか映らない視界で見ているようなものだつた…。

そんな色の無い空を見上げながら…ポチは、かつて父が話した言葉を思い出す

…
「人は死ねば空に帰る…
だけどなポチ…人は、空に帰つても空に浮かぶ白い雲や風となつて、
大好きな人達を見守つてゐるんだ」

それは、ポチがいつも見る空の色とは違つていた…。

「父さん…見えてる?
ぼくは、ここにいるよ」

それから陰口達に航海券を一枚手渡し…港へ向かうポチの心は、人の時に見た時と変わらないあの青空の色をしていた…。

『つづく…』

第2話【理想と現実のはざまで】 Aパート（後書き）

ゴボルトになつたあとのポチは、自分の目で見る映像が…すべて白黒テレビに映るような景色になつています。
姿や毛色は柴犬をイメージしてもらえば… それと身長は1メートルくらいです。

第2話【現実と理想のはざまで】Bパート

… 20年後・・・・・

ここは、どこの洞窟どうくつだらうか？

その薄暗い場所の中で、幼い少女めいじょが一人立っていた。

その足下には、小さな泉が碧色みどりの光を放つてゐる。

水色の羽衣を着た白い髪の少女は、岩で出来た地面にひざまづき…両手を使って目の前の泉の水をすくいとると…

その水に映る景色を紅い両目で見る…

そして両手ですくい上げた泉の水の中に映るものは… 1人のゴボルトの顔だった…

？？？

「もうすぐ…もうすぐ迎えに行くよポチ…」

。

ジパンング

ポチがいた国からはるか東にある国で「」のよつな形をしていいる小さな国で…陰陽術など独自の伝統魔術が多い国である…。

またこの国は弓の形になつてゐる事で分かる通り…

私達が知る日本と違い…北海道や沖縄にあたるとこもすべて陸続きとなつており…隣の国ともつながつていた…。

そのジパンングの中にKYOTOと呼ばれる場所がある。

その中のマキノという街の裏通りにある特殊人対応刑務所の囚人の部屋の中にポチはいた

。

囚人部屋

中央に囲炉裏いろうのある昔話に出てきそうなサッパリとした部屋で…ポチは、正座をしながら何かを待つてゐた…

。

そう…あれからポチには、色々な事があつた…。

ジパングに渡つてからのポチに待ち受けていたのは、過酷な現実だ
かく

つ
た

二の國では、多くの人が外國人を愛おへてゐるが、おまへは、外

明らかだつた。」

そのためにボチ

談所に通つても…受け入れてくれる所がなかなか無く…

金の事》の仕事ばかりだった

（時にはホームレスとして生活していく事もあつたなあ…）

身長180センチに近い大人の「ボルトとなつたポチの頭に… 思い

主ひたくもなに難い事か浮かんでくる。

そんな白いジヤージを着たポチの囚人部屋の扉が開き…

つて来たので…ポチは立ち上がつて

100

「古川さん」

その看守の名前を呼ぶと、その古三と呼ばれた男は

三一
屋根ヤ

そう言つてポチをその場所に座らせて…
自分も囲炉裏をはさんだポチの向かいのところにあぐらをかくと…

。 ポチ
「・・・・・」

。 古川

。 「・・・・・」

。 それからポチと古川は…少しのあいだ沈黙していたが…古川が、
「なあポチ…」

なぜ?詐欺犯の一人に噛みついた…。

。 騞されたのはお前の知り合いであつて、お前じやないだろ?…」

。 そう話しかけると…ポチは、

。 「騙された人の気持ちが分かるからですよ…。
夢や希望を逆手にとられて騙されてしまったあの人の気持ち…俺には良くわかるから…」

。 古川

。 「お前…」

。 だから詐欺犯に連絡をとり…ポチの知り合いから手を退くように迫つたのだろう…

。 古川

。 (だがそれを聞いた詐欺犯は、逆ギレしてポチを脅そうとした…
だからポチは、そいつの右腕に噛みついた…と言つ訳か…)

。 真実を知れば知るほど古川は、ポチに同情したくなつたが…

。 「だがな…ポチ

この国は、どんなに腐った奴でも人権という厄介なもとに守られて
いるから…外国人の…
ましてや亞人種のお前が悪者にそれてしまつのは、仕方の無い事な
んだよ」

「そう古川が言つと…ポチは、

「わかつてますよ。」

…と、この一十年で覚えたジパングの言葉で寂しそうに話し…
それから囲炉裏をはさんで、自分と向かい合つて居る古川に

「それで何か他に用があるんですか？」

正座しながら他の事を聞いてみると…古川は

「ああ…そう…」

…と、この部屋に来た本来の理由を思い出して

「お前…今日からこの刑務所を出られようになつたぞ…」

そうポチに話すと…それを聞いたポチは、

「は？」

「な…なんですか？」

いきなりこの囚人部屋を出ていいと言われたので…
どうしていいかわからずに戸惑つて居ると…古川が

「ずいぶん前から…お前をここから出してほしいと頼んでいた人が
いたらしくてな…

お前のために保釈金まで払つてくれたそうなんだ」

そのほかにも弁護士に頼んだり……ころころとにかくポチを出すために努力をしてくれたらしい……と呟つこと話をすると…ポチは、不思議そうに

「一体どんな人なんですか?」

古川に聞いてくるので…古川は

「オレもくわしくは知らんが…

担当者の話では、いつも子供に使いを頼んでいらっしゃー…」

「子供に?何故そんなまわりくどい事を…」

ポチがそう聞いても古川は…

「ああ、知らんよ。」

まあすぐに出られるんだし…自分の田で確かめてくれればいいだろ」

そう答えるばかりで…例えポチが

「看守が囚人にそんなにフランクで良いんですか?」

そう話したとしても…古川は、

「かまわんさ…」

お前が真面目な性格なのは、良く分かってるしな

そうかわして…立ち上がりながら

「さてと、そろそろここをでるわ…」

いろいろ手続きが必要だから…お前は、あとから来いよ…」

そう言って、それに対して…ポチが、

「はい！」

「ありがとうございました！」

立ち上がりながら頭を下げる、古川は

「あとで住所を渡すから、刑務所を出たらちゃんと保釈金を払った人のところに行つて、お礼を言つんだぞ。」

額の前に人差し指と中指を立てた右手をシュタッとかざして

「じゃあな…ポチ」

。 そう言つて囚人部屋から去るのだった…

それから五時間後…

ポチは、刑務所を出る時にもらつた住所を頼りに
ポチを刑務所から出してくれた人物の家へ向かつていた…

そして…とある場所の路地裏に差し掛かると…そこでポチは、ふと
立ち止まって…右手で取つた紙切れを見る…

「えへと…ここを南に行つたところで…つと」

。 そう言つてから…また歩き始めたポチの前に突然

「よひ」

。 黒いスーツを着た170センチくらいの身長の男が立ちふさがる。

そして…髪を金髪に染めたその男にポチは見覚えがあつた

「お前は……確か詐欺グループの……」

ポチがそつ言つとその男は、ニヤツと邪悪な笑みを浮かべて

「そりゃ……テメエのせいで所属していた組織がつぶされ……そのあげくに右腕を噛かまれたせいで、しばらく右腕が使えなくなつた詐欺犯だよ。」

…と憎しみがこもつた口調で話す。

それを聞いたポチは、あきれたように

「何を言つかと思えば…

右腕をケガしたのは、お前おが脅おどそうとしたからだし…詐欺グループなんて潰つぶれた方が世の中のためだろ。」

むしろその事をいつまでも根にもつているお前の考えがおかしいと

…その男に話すと…

黒い靴はを履いたその元詐欺犯は

「つるせー！この偽善者ぎせんしゃ！」

…と、いきなり怒りだしてきたのでポチは

「やれやれ…まさか善行を重ねていないと自分が人かじゃないか…他の生き物を偽善者呼ばわりできるとはな…」

人を偽善者と呼べるのは、それ以上の善人だけだぞ

…と話すと…

ポチの3メートルくらい前にいる…その元詐欺犯は、「いちこちつるせーぞテメエ…！」

殺すぞ！「ノノヤロー！」

…と叫ぶので、ポチはさうにあきれてしまい

「路地裏とはいえ、人が通る道のまん中で叫び声をあげるなんて…
ホントお前は自分の事しか考えていない愚か者だよな…
今度は、足にでも噛みついてやるつか？」

「そう言つたあと『ボルト』である自分の口を開くと…
襟首にかかるくらい少し長い髪を金髪に染めた元詐欺犯は

「おう…やつてみるや『ラッシュ…』」

…と脅すような口調で言つてきたので、ポチは少し感心して

「へえ~

卑怯者の集団だと思つていた詐欺グループの一員に、まさか一対一の戦いを挑まれるとはね…
けどオレは白いジャージを着て動きやすいのに対し、君はスーツを着ていて動きにくいだろ？…
一対一の勝負ならいつでも承けるから、『』は出直して来た？…

先ほどのとは違い…まだやかな口調でやつて話す。

しかし元詐欺犯は、そこで…

「いや…その必要は、ないわ…」

「…
ニヤッ…と、再び邪悪な笑みを見せね…
その様子を見てポチが、

「まわか！」

…と気づいた時には、すでに遅く…

後頭部に、ゴン…と金属製のバット柄しきもので殴られたような衝撃が伝わるが…

それでもポチは、ほんの数秒だけふんばつて

「ひ…ひきょう…も…の…」

…とそう言つたあとで、ドオッと前に倒れると…

うしろからバットでポチを倒した元詐欺犯の仲間が
「ふん。

卑怯者じやない詐欺犯なんて存在する訳ねえだろ。」

バットを右手にもつたままそいつぶやくと…元詐欺犯に

「やれ！甘次

オレがやられたみたいにそいつの右手も使いものにならなくしてや
れ！」

そう言われて、アマジと呼ばれた長身の男は再び両手に持った金属
バットを頭上に振り上げ

「だとよー悪く思つなよ」「ボルト

。 そう言つて、路地裏にひつ伏せに倒れるポチの右腕に向かつて振り
下ろす。

：だがその途中で…

ガキイイイーン…！

「なにいーーー！」

アマジが振り下ろしたはずのバットが突然何かによつて止められて
いた

。 それは…

「バ…馬鹿な…孫の手だとお！」

小さな少女ポチの右腕をまたいで…自分の頭の上で

左手に持つた孫の手でアマジのバットを受け止めた光景だった…

90センチくらいの小さなその少女は、頭にかぶった麦わら帽子のツバの部分を

右手の人差し指の指先で、顔の前でクイックと上げて

「へつへーん 正義の味方とおじょー」

麦わら帽子によつて隠れていた紅い両目で、自分の倍以上の身長があるアマジを見上げていた

肩までとどくくらいの薄い桜色がかかつた白い髪に、黄緑色の服と同色のスカートをはいたこの麦わら帽子の少女は、何者なのだろうか？

、
『つづく…』

第2話【現実と理想のはざまで】Bパート（後書き）

次回予告

突如

ポチを救いに現れた

おさな
幼い少女…

ポチを

ひだ
日溜まりの

ような

明るい場所へ導く

その少女は何者なのか？

♪ 次回、第3話、

小さな魔法使い♪

物語は、
一気に
メル編に…

第3話【小さな魔法使い】Aパート

これまでのあらすじ

白いジャージを着た
コボルトのポチは、
刑務所を出て・・・

ポチを刑務所から
出してくれた人の
ところへ
向かおうとした時に

なぜか？

その日にポチが、
刑務所を出る事を
知っていた・・・
元詐欺犯達に
襲われる。

そして、

元詐欺犯の仲間である
アマジという男に、
ポチが後頭部をバットで
叩かれて倒れた時、
とどめをさそぐと
振り下ろされる
アマジのバットを・・・
突然現れた少女が

左手だけで持った
孫の手で
受け止めるのだった。

アマジは、自分が
振りおろしたバットを…

左手だけで持った
孫の手で受け止めた
小さな少女を
睨みつけて

アマジ

「正義の味方だあ?
お嬢ちゃん、
良い子だから
そのまま帰んな。」

意外に良い人ぶりを
発揮し・・・

それを見ていた
元詐欺犯が

「アマジ!」

…と叫んでも、

薄い青色の
作業服らしきものを着た
アマジは、

「ひるめーなー！

この国は、子供の数が
少ないから…

手を出したら

重罪

だって、お前も
分かってるだろ？

…と、

この国の事情を話し…

元詐欺犯を

「くつ…」

納得させると、

自分のバットを孫の手で
受け止めている女の子に
アマジは…

「…と、いうわけだ。

わざわざと帰んなな…と、

そいつついで、

この場所から
帰らせようとする。

しかし赤いクツをはいた
その小さな女の子が、

「はい。分かりました。
じゃあ、ポチを連れて、
このまま帰りますね。」

左手に握る孫の手に
力を

いれながら……そう話すと

アマジは、

「コボルトを連れて

帰るだあ・・・このガキ

調子に

のりやがつて！」

そう言つて、

両手に持つていた
バットから・・・

左手を離^{はな}して、

左拳を

くりだそうとした時、

キン！…ビシイッ！…

とこう衝撃音と共に、

アマジの右手に
握っていたはずの
バットが…

アマジの右手を離れて、
空に舞い・・・

それと同時にアマジの
右の手首に痛みがあった

…それは、あまりにも
一瞬の事で、

間近まぢかで

見ていたアマジには、
見えなかつたが・・・

少し離れた場所で

見ていた…元詐欺犯は、

「連續攻撃だと…」

麦わら帽子をかぶった
少女が、一瞬のあいだに

左手に持つた孫の手で

アマジのバットを素早く
振り払い

その後、

刀を抜く前の
侍のよう

腰の右側の方に
左手に持った孫の手を
もつていつてから…

居合い切りの
ようすに・・・

アマジの右手首に
一撃を
加える様子が
見えていたので、
驚いていた。

しかし、その事に
気づかないアマジは、
自分がその少女の
倍以上の身長があるので

「ふん。 だがな、
お嬢ちゃん…
ちつちえー子供が、
孫の手一つで、
大の大人に
勝てる訳ねえだろ。」

そう言って、

少女を
見下ろすと…

少女は、頭にかぶつた
麦ワラ帽子のツバを、

また右手の人差し指の
指先で、
クイツ…と、上げて

「そうですか？
だって、お兄さんは、
もおすでに、
フワリの魔法に
かかっているんですよ」

そう言って紅い目で
アマジを見上げると…

アマジは、

「お兄さんなんて
ご機嫌きげんとつても手加減てかげんは…
何！？」

いつの間か自分の…前、
うしろ、右横、左横と、
四方向に…
同じ姿の少女が
立っている事に気づく…

アマジ

「四人に増えただと?
残像か?」

いや、違う。これは…」

そう話す、

アマジの様子が
おかしい事に気づいた
元詐欺犯は、

「おい…どうした!
アマジ…おい!」

何かを思い出すような
顔で遠くを見ている
アマジに
何度も声をかけて…・

そのあと、

黄緑色の服と同じ色の
スカートをはいた少女に
視線を移し…

元詐欺犯

「このガキ!アマジに
何をしやがった!」

…と叫ぶと、

薄い桜色がかかった

白髪が肩までとどく

くらい長い

その麦ワラ帽子を
かぶつた少女は、

「あの、お兄さんは、
魔幻想曲の世界の中で、
自分自身と
向き合っているのです。
そして、わるい人さん、
あなたも・・・。」

そう言って、

右の中指と親指で、
パチン！と、音をたてる

すると・・・元詐欺犯は、

「まさか、
指^{ゆび}パチン
とはな[：]。
確かに良い音^{あと}
してるとと思うが・・・
それがどうかしたか？」

左手に孫^{たす}の手を持った
少女に尋ねると

・・・その小さな少女から、

「まわりを見て、」

そう言われたので、
元詐欺犯はまわりを見る

すると・・・

「何？空中に光の文字が
浮かぶだと？」

しかも、その光の
文字や、記号は、
立体魔法陣のように

円周に

元詐欺犯のまわりを
かこ
囲みこむが

よく見るとそれは、

元詐欺犯
がくふ
「樂譜？」

そう・・・元詐欺犯の
言つように、それは、
立体魔法陣型《りつたい
まほうじんがた》の
樂譜だつた・・・。

元詐欺犯がそれに気づくと…

麦ワラ帽子をかぶった

少女は、

「そうです。

これが、フワリの作った
魔幻想曲の三次元楽譜。
わるい人ひとさんは、今
フワリの作った
結界の中に

閉じ込められたのです」

つまり、

フワリの勝ちです……と、
詐欺犯に
勝利宣言『しおり
せんげん』する。

しかし、元詐欺犯は、
「まだだ！
お前をやつつければ、
この変な空間も！」

…と少女に向かつて走り
右拳で殴りかかるが

拳が
少女の顔に、
とどこどした直前で

少女

「無駄です・・・。」

赤いくつを履いた

少女は、
残像を

残しながら、

まるでスケートのよひこ
地の上をすべる事で

まるでその少女自身も
残像であるかのように、

右拳を放つ、

元詐欺犯の身体を

真正面からススはなーと、
すり抜け

元詐欺犯の背後に立つと

少女
「これは、「残像流歩」
魔法か武道を知らないと
フワリを
捕まえる事は、
出来ません・・・。」

さうに少女が
そういって、

「やじて、〔雪幻夢想〕」

再び

右の中指と親指を使って
パチン！という音を
出した時・・・

元詐欺犯の頭に
電気のようなものが走り

それと同時に、田の前が
一瞬ま
真っ暗になる・・・。

そして・・・

再び開いた

元詐欺犯の目には・・・

「雪が・・・
降つてゐる・・・。」

そこに少女の姿は無く

ザクッザクッ・・・と、
両足に履く靴では
踏みしめられるほど、
たくさんの雪が
降り積もつていた・・・。

そして、元詐欺犯は、

いつの間にか自分の両手に灰色の毛糸で作られた
手袋が

はめられている事に気づき…

「くそつ、なんだ?

なぜか雪ダルマが
作りたくて作りたくて、
しうがない……。」

欲望の

赴くままに

雪ダルマを作り始めるが

その時、元詐欺犯の耳に

(なんだ・・・小鳥の
さえずり声のような
綺麗な声で、
誰かの歌声が
聞こえてくる・・・
この声は・・・)

【元曲=母さん、お肩を
叩きましょ】

：ゆ～きだるまを
つくりましょ～・・・
りんとんたん・・・

りんとんたん・・・
てふくろでつくり
ましょー・・・
りんとんたんとんりんとんたん・・・・・・

雪を、手袋はめた両手で
ころがしているうちに
元詐欺犯の頭の中に・・・

子供だったころの

純粹な

思い出が
蘇つてくる

元詐欺犯

(あのころは・・・
こんな事も、楽しくて
仕方なかつた・・・。
なのに、いつからだらつ
いろんなものが、
つまらなくなつてしまつたのは・・・
いや・・・違う。
つまらなくなつたのは、
オレ自身か・・・)

りんとんたんと、

雪の世界に流れる少女の
歌声は・・・

元詐欺犯の
汚れきつた

欲望を子供だったころの

純粹なものへと、
変化させていた・・・。

子供だったころの
純粹な気持ちを
呼び起こす魔法・・・
それこそが
魔幻想曲の一曲
「雪幻夢想」なのである。

そして、現実世界では…
麦ワラ帽子をかぶった
少女が、

魔法がかかる
状態の

アマジと

元詐欺犯を見つめ…

「」のお兄さん達が
幻想世界を見ている
時間は、

あと、九分くらいかな…
そのあいだに、なんとか
ポチをつれださないと」

そう言って、
うつ伏せに倒れている
ポチの方に
視線を移すと…

少女

「へみゅ～・・・

おぶつていぐ

しかないよ～。」

さつそく実践だ…と、
いわんばかりに

左手にもつた孫の手を、
立つたまま
遠くを見ている
元詐欺犯達の近くに
置いてから…

そのあと・・・
うつ伏せになつていた
ポチを背負せおい

「「」おおー！
お…おもこ・・・」…と

自分の両肩の上に
ポチの両腕を乗せると、
背負つたポチの両足を
ズルズル・・と、
ひきつりながら

「うんしょー、うんしょー。」
…と、

自分の家まで歩くのだった…

【Bパートへ続く】

第3話【小さな魔法使い】Aパート（後書き）

ここで、この世界の
特色などを一つ、
紹介します。

記憶の継承

この世界の魔法使いは、
魔法を使って、
自分の記憶の一部を
相手に
移植『うつす事』が
出来る。

その情報量などは、
波長が近いかどうか・
など、
いろいろな条件などが
あるが、国によつては、
両親の記憶の一部を
うつす事を
伝統としている事が
あるらしい・・・

ジパングでは、
一般的に
師匠が
弟子に
魔法や剣術と

いつたものの知識を、
理解させるための
方法として、
使われている
・
・
・。

第3話【小さな魔法使い】 Bパート

その村には、
見覚えがあつた…。

藁^{ワラ}や木で

作られた、多くの家に…
村を囲む、

森と呼ばれるたくさんの木…

その光景を見て

コボルトであるはずの

ポチの両目に

涙があふれていた…。

ポチ

「不思議なものだな…

父さんと夢を
語^{かた}つた、

この場所が…

今のオレにとつての
夢になるなんて…」

その村の大地に

膝^{ひざ}を抱^{かか}えて

座り込み

過ぎさつた

思い出にひたつていると

そこに…

？？？

「素敵な村…
ここがポチの
夢の場所なんだね…。」

肩までかかるくらいの

薄い桜色がほのかに

混ざつた白髪の

少女が…

いつの間にか

ポチの前に立っていた…

そして…・・・

「でも…」…と、

水色の羽衣

を着た、その少女は…

さらに…

少女

「でもポチには、
フワリと一緒に
未来に夢をみてほしい…
だから…だからね、ポチ
フワリと一緒に
ポチの村を…・・・

新しい番犬族の村を

作つていこう・・・ね?

フワリがんばるから!」

頭のうしろに青い大きな

リボンをつけた、

その小さな少女は、

そう言つて、

ポチに左手を差し伸ばす

その少女が誰なのか、

ポチは、知らない・・・

ポチ

(知らないはずなのに・・・何だ?)

押しつぶされそうに

なるほど、胸が・・・

痛い・・・)

切なくて、悲しい、

誰かの面影が、

一瞬、その少女と
重なり

ポチ

(そうだ...昔、誰かに
こんなふうに手を
差し伸べられて、
オレは・・・)

そこで、差し伸ばされた

手を取ろうと

右手を伸はした時

そこで…ボチの夢が、途切れてしまつた…。

~~~~~

トは、反

電気の「バブル」

真っ白な部屋の中で

ベッドの上に寝ていた  
自分の上に、  
かけてあつた布団を  
起きる身体の上半身と  
一緒に上げると・・・

ポチは、なぜかそこで何者かの気配を感じた…

ボチ

（間違いない。・・・  
誰かがオレを  
狙つている…）

そして、次の瞬間！！

何者かが！？

「ポチー！」

めがさ＊＊＊＊＊

ポチの身体を狙つて、  
飛び込んできた！！

ポチ

（フライングボディプレスだと…）

そのプロレス技に  
対抗するために…

飛びかかつてくる、

その何者かに向けて…

右拳を  
放ち！

その小さな影は、

「きやん！」…と、いう  
叫び声と共に

後方へ

吹き飛ばされた…

しかし…・・・ポチは、

自分の右拳にぶつかつた

何者かの

感触が

感触が

(むにゅん、としたいた)  
ものだから…

「まさか！」

ポチを  
襲<sup>おそ</sup>つた者が、

吹き飛ばされた方向へ

目を向けると…

そこには…小さな少女が  
横になつて、

倒れていた…。

ポチ

「子供…とこつ事は、つまつ…」

ポチの頭に幼児虐待<sup>おじめ</sup>といつ  
言葉がよがる…。

ポチ

「いかん！早く

救急車を呼ばないと…」

…と、ポチがベッドから  
離れようとした時…。

少女  
「こきなり、ぱんちは、

ひどいよ。ポチ・・・

黄緑色の服と同じ色のスカートをはいた少女が何事もなかつたかのように起き上がり・・・

それを見たポチが、まだベッドの上に座つたままで・・・

ポチ

「いや...『メン』『メン』。

てつくり

フライングボディプレスで...飛びかかってきたものだと思ったから...本当に『メン』ね...」

...と、

両手をついて、  
謝<sup>あやま</sup>ると...

少女は・・・

「じゃあ、許したげる」

やつれて、

それを聞いて...

「はやー...」・・・と、  
思わず口に出すポチ...」

少女は、

「だつて、いつまでも  
怒つたつて、  
しょうがないし……  
それで、その、  
ふらいんぐ・ぼでー  
ぴゅれす……つて、  
なーに?」

・・・つまり、

フライングボディープレス  
についての説明を  
求めてきたので……

ポチ

「身体を使って、  
相手に飛び込む  
プロレス技の事さ……  
つまり、

ボディアタックの  
事だな……」

……と、

ポチが説明すると……

少女が

「ぼ……ぼでーあたつく!  
そそそんな、  
だいたんな事フワリは、

しないよー。」

と、  
頬を  
薄紅色

に染めて・・・

そんな顔の前を  
広げた両手で、  
ブンブン  
横に振りながら

驚いた声を  
あげるので

ポチは・・・  
「?????どうして、  
そんなに驚いた声を  
あげてるんだ?」と、

尋ねると

少女は、  
両手の人差し指の  
指先同士を  
くっつけながら

「だつて、

少女マンガとかで  
見てるけど・・・  
しゅ・・・しゅ『いんだもん

アレ・・・

そのあとば、  
「ハーフハーフ」としか  
言わないの

ベジドの上で、ポチは、

(最近の少女マンガって  
プロレス技が  
出でてくるのか?)

それは、確かにすごいと  
感心するのだった・・。

そして、一時間後・・・

ポチが、布団を出で、

その女の子の部屋の  
テーブルの前に  
正座

していると・・・

一度、部屋を出で・・・

他の場所に行つていた、

少し温めた

ミルクを入れた

マグカップと、お皿を

乗せたお盆を

両手に持つて、

部屋の中に入つてきて…

ミルクを入れたお皿は、  
ポチの前に…

マグカップは、  
自分のところに  
それぞれ置いて…  
ポチの向かいに正座した

そこで、ポチは、  
正座したその少女が

コボルトである自分が  
飲みやすいように…  
わざわざミルクを、  
お皿に入れてくれた事に  
気がつき

ポチ

「 そ う い え ば 、 なん で  
君 は 、  
オ レ の 名 前 と か の 事 を  
い ろ い ろ  
知 つ て る ん だ ？」

その事について尋ねると

薄い桜色がほんのり  
混ざった白髪が、

肩まで

とどくべらこ長い

その少女は、

「それは、フワリが  
魔法使いだからだよ。」

そう言つので、ポチは、

(やれやれ・・・  
やつぱり、あれは、  
ただの夢だったか・・・)

ハアツ・・・と、

ため息を吐くと・・・

頭のうしろに青く大きい  
リボンをついた

そのフワリという少女は

「むひつ・・・

信じてないなポチ・・・

と、

膨らませるので

白いジャージを着た

ボチは、

「あ・・・・・・・・・・・・

信じてゐた・・・・・

そう言ひながら、

頭の中では…

（最近、魔法のおもちゃも進化してきて、  
見た目からは・・・・・  
本当に魔法を使つてゐるようにも、思ふのからな…）

そんな事を  
思つていたせいか

少女に

「むむむつ、

やめなさい信じてない

・・・

見やがふられてしまい・・・

それから、少女は、

「よおし…

じゃあ、信じさせたば

・・・・あり？

そこまで言つて、

黙ってしまったので

それを、  
テーブルの向かいから  
見ていたポチが

「どうした？」

…と、

同じように正座していた  
少女に聞くと…

少女は…

「フワリ、まだ説明とか  
ヘタで、上手く  
言えないから…  
そうだ！

いつしょに公園に行こう  
ポチ！」

思いつきなのか…  
突然そんな事を  
行つてきたので

ポチが…

「本当、いきなりだな

そう言つと、

黄緑色の服と同じ色の  
スカートをはいた

その小さな少女は、

様子を

うかがうように  
ポチを見てから…

「「めんなさい…。  
でも、フワリのお友達に  
そういう説明が  
得意な子がいて、  
ついでにポチに  
その子を紹介できて、  
いつせきにちよっだし…  
だから公園なら、  
その子とポチを  
会わせるのに、  
ちゅうどいいと  
思ったの…」

そう言つので、

ポチは、テーブルの前で  
正座しながら…

「公園に行くのは、  
いいが…。  
その子の予定とかは、  
大丈夫なのか?」  
…と、  
少女に話すと、

その少女は・・・

「うん。だいじょーぶ、  
だいじょーぶ。」

：と、言ったあと・・・

立ちあがって、

少女

「行こ。ポチ。」

そう言いながら、ポチに  
左手を差し伸ばすので・・・

ポチは、右手で

その少女の

左手を取りながら  
立ち上がり、頭の中で、

（ひょっとして、もう  
連絡をとつて  
いるのか？）

そんな事を思いながら、

紅い目をした、

その少女のあとに  
続いて・・・

少女の部屋を

出るのだった

それから・・・

出会った少女の

部屋を出たポチは、

少女の家の一階へ降りて  
玄関の

ドアから外へ出るとい、

その女の子と一緒に

少女が言つ

公園みたいなところに  
向かつて歩いていた

それから、ポチは、少女に・・・

「フワリはね・・・  
雪音=フワリって、  
いつ名前なんだよ。」

・・・と、

少女の名前を  
教えてもらい・・・

ポチ

「ふわり・・・って、  
どう書くんだ?」

・・・と、

ポチが、その少女の  
名前について  
尋ねると…

少女から

「カタカナでフワリって  
書くんだよ。」

…と、

説明をうけたので、

歩きながら…ポチは、

「ジパング人なのに  
漢字の  
名前じゃないのか?  
けしからんな、  
それは！」

カタカナの

名前だった事に  
怒つてみると…

ポチの右隣を  
白い靴で  
歩いていた…  
フワリといつ、  
その少女が

「フワリの名づけ親を

悪く言つちやダメだよ。

ポチ」

そう言つて、チラリと  
ポチの方を見上げるので

白いスニーカーで  
歩いていたポチは、  
一瞬、フワリの方を見て

「あつ、こや…『メン』」

フワリに謝つて、  
再び前に視線を戻すと、

モミアゲと呼ばれる  
耳の前の髪が  
肩までとどくぐらに長い  
フワリが、

「じやあ、許したげる」

そう言つて…

ポチは、

そんなフワリに

「なあ、フワリの家には  
親がいないのか？」

悪いとは、思いながらも

気になつていた事を  
聞くと…

フワリは、前を見ながら

「うそ。フワリは、なぜか  
お父さんやお母さんが  
いないらしくて…

おじいさんと、

おばあさんと一緒に

暮らつたの…。

けど、おばあさんは、  
フワリが三歳のころに  
死んじやつて…

おじいさんも一年前に

少しだけ、暗い影を  
落とした表情をする

フワリに…ポチは、

「やうか…すまないな。  
デリカシーとかなくて」

…と、  
歩きながら…謝ると、

その隣を歩くフワリは、

「フワリ…と、  
ブンブン首を横にふり

そのあと、歩きながらも  
ポチの方を見上げて

「だからね・・・  
フワリませ、  
ポチに念ひのを  
とつても、とおつても、  
楽しみにしてたんだよ」

「とおつても、」と、  
暫<sup>いのち</sup>ついにだけ  
一瞬<sup>いっしゆん</sup>  
両手を広げて…

そのあと、  
うしろに両手を組んで  
歩きながら、  
ポチを見上げる・・・。

その紅いクリクリした  
両目を見つめらながらも  
ポチは、  
そういうえば…と、今、  
自分が置かれた立場を  
冷静になつて、考え…

ポチ  
「なあ、それでオレは、  
どうすれば  
良<sup>よ</sup>いんだらう?」

そんな事を歩きながら、  
言つので、フワリは、  
不思議そうな顔で

「えつ？」

このままフワリと  
暮らせば……と  
言つと、

白いジャージを着た

ポチは、  
「捕まるだろ  
普通・・・」

ポチ

（何も知らない人から

見れば・・・  
赤頭巾の

家に

狼が

住んでいるように

思われても、

しかたないもんな……）

対象に  
逮捕の  
警察の  
このままいけば、

なる事を告げて、

やがて・・・

ポチ

「それ」「のまま、  
うまく一人で生活  
できたとしても…  
お金は…・・・ん?」

そこでポチは、

(ナニだ!?)「のま  
せいかつひ  
生活費は

どうしてたんだ…・・・(

その事に気がついて…  
歩きながら、フワリ

「なあ、フワリは、  
今までどんな生活を

してこたんだ?」

…と、

聞いてみると、フワリは

「今、言つても

いいんだけど…・・・ま

ら公園が見えてきたから、

あの子にまかせるよ。」

両手を「うしろ」に

組んだまま…

エヘヘッと、ポチを  
見上げながら  
笑いかけてくるので…

ポチは、そんなフワリと  
一緒に歩きながら

（また、あの子か…。  
どんな子なんだろう…）

そんな事を考えつつ…

公園らしきところの中へ  
足を踏みいれるのだった

・・・・・

月の青い光が、  
夜空を照らす中…

公園にいた

ポチとフワリは、

その光が一番強い場所で  
立っていた…。

ポチは、まわりを

キヨロキヨロと  
見渡したあと

「それで、フワリが  
言つていた子つて、  
一体どこにいるんだ?」

…と、

自分の前にいるフワリに  
聞いてみると、

フワリは…

「ちょっと待つて…  
今、呼び出すから…」

やつ言つて、目を閉じる

それを見て、ポチが

「おこ…」…と、  
声をかけようとしたら時、

ポチの3メートルくらい  
前に立つて、  
目を閉じたフワリが、

「鈴鹿ちゃん」…と、  
誰かの名前を呼ぶ。

すると、どうだろう…

ヒュウウウウ…と、  
フワリの前に風が吹き…  
風に吹かれてゆれる

白い髪が毛先から

徐々《じょじょ》に

青く輝く

かがやく

黒髪へと変化していく…

そして、紅い色から  
むらさきいろ

紫色へ

変化した両目が

閉じていたところから、

ゆっくりと

開かれた時…

そのフワリであって、  
フワリではない誰かが、

「応じたぞ。」

…と、

前に呼びかけたフワリに

答えて、

そのあと、ポチを見る。

それを見たポチが

「え？ …」 …と、

かける言葉を  
失つていると

その紫色の目をした  
少女は、

「始めるとして…かの?  
鈴鹿と申す。」

ほがらかな  
フワリの声とは、  
あきらかに違う…  
透き通った声で

よろしくの…・…ヒ、  
ボチに囁いた…。

【4話へ続く…】

### 第3話【小さな魔法使い】 Bパート（後書き）

次回予告

フワリの身体を  
うつわ  
器にして突然  
あらわ  
現れた  
すずか  
鈴鹿という

少女。

かつてジパングに  
存在したといわれる、

てんにょ  
天女が

かた  
語る

ムニモシユネーと  
呼ばれる者の  
もの

宿命、とは…。

次回、第4話

【舞姫】

前世・・それは、

かつての人格と存在を

呼び戻す

ひみつ  
秘密の  
かきあと  
鍵音  
・・

## 第4話【舞姫】Aパート

外出する前…

電気がついた

フワリの白い部屋の中

ほんのり桜色に  
染まつた肩にとどく  
ぐらいの白い髪をした  
少女フワリは、

「これを、

フワリのお友達に  
渡してほしいの…」

そつ置いて、

左手に持つた

扇子を

ポチの右手に手渡すと、

ポチは、  
右側の

ポケットに、

その扇子をしまい

ポチ

「なあ、これって

何かに

必要なものなのか?「

…と、話すと、  
フワリは顎に  
右手の人差し指をそえて  
考え込み

フワリ

「うーん。  
必要なのかな?  
どうなのかな?うん  
必要だよ。きっと

そう言つて、

ポチ

「はあ…」

ポチを

混乱させるのだった…

そして…それから…夜、  
公園らしき場所に  
外出したポチの前には…

公園らしきところの中に  
立っていた、  
百八十センチ近い身長を

したポチは、

夜空に輝く

月の光の下で、

紫色の目で

ポチを見つめる、少女に

ポチ

「き・・君は、一体・・」

と言ひながら、頭の中で

(一重人格？)

いや・・それでは、  
姿形が

違う事の説明がつかない

・・・だとしたら・・・

これは・・一体・・・)

なんなんだろ・・・と

考へていると・・・

肩までとどくぐらいの

青く輝く黒髪をした、

鈴鹿と

呼ばれたその少女は、

「まあ、待て・・・

まずは、そのジャージの

右のポケットから

はみ出でいる

赤色の扇子を

せんす

妾に渡して

欲しいのじゃが…。」

そう話しかけて来たので

白いジャージを  
着たポチは

「あ・・ああ・・・  
そうだったな・・・」

鈴鹿という黒髪の少女に  
近づいて・・・・・・

右のポケットから右手で  
取り出した扇子を…

もみあげといつ

耳の前の髪が…肩まで  
とどくくらい長い・・・  
その少女の左手に  
手渡したあと

また、うしろに下がつて

1メートルくらい  
距離をとると、鈴鹿は、

「かたじけない・・・

フワリとは、違つた

落ちついた声で、  
ポチに、お礼を  
言ったあと、

鈴鹿御前

「聞きたい事は、  
わかってある……。  
わらわ  
妾とフワリの  
関係についてである」

そう言って、  
それに対し、ポチが  
コクリと首を  
縦に振つて  
頷くと、

鈴鹿は、

「では、話すとしよう」

…と、

長い話を始めた。

鈴鹿御前

「ポチ殿は、

最後の竜という話を  
存知て  
あるか？」

ポチ

「ああ……知ってる。  
メテオによつて大災害を

受けた時に…生き残った  
唯一の竜で、確か、

そのあと、人間の  
先祖に魔法を

伝えたと

いわれてるんだよな…」

ちょっと自身なさげに  
答えるポチに、鈴鹿は、

「もうじや。しかし…  
その話には、  
異説もあるのを、  
ご存知か?」

そう答え、ポチが  
「まつ…・どんな?」

そう聞くと、

鈴鹿御前

「あの時、最後の竜は、  
肉体が滅んで  
しまった…・と、  
申す話じや…」

それは、驚くべき話  
だつたが…・  
ポチにしてみれば

(まあ・・歴史は、

事実では、ないし・・・

証拠が

あれば・・・

ほかの仮説を

たてるのもあり得える。

それより・・・

気になるのは・・・

そう考えたポチが、

「その仮説が、  
君とフワリと、なんの  
関係があるんだ?」

その事を聞くと・・・

鈴鹿は、

「最後の竜には、  
肉体が滅びても  
記憶を残す

すべがあつたのじや。

それは、かつて竜達が

宇宙から来た者達と、質の良い  
カーバンクル《竜の脳の中にある紅玉の事》を

集めて作つた

ドラゴンオープと申すものでな・・・

そこに、

自身の記憶を  
残したのじや  
「やじや」

そこまで聞いて、  
ポチは、ある事に  
気がついた

ポチ

「ちよつ…ちよつと待て  
それじや、最後の竜つて  
・・・まさか…」

鈴鹿御前

「そう…今、そなたの  
考えておる通り  
ドラゴンオープ  
そのものが最後の竜と  
呼ばれておったのじや  
」

その話にポチは、  
驚いたが、

今は、それより…

ポチ

「それで、その  
ドラゴンオープとやらが  
どうやって、君達と  
関係していくんだ？」

気になつてこる事を

聞くと、鈴鹿は

「かつて世界がケムダーの脅威にさらされた時、

ある天才がドラゴンオープの力を使ってフェニックスシステムと いうものを作った・・。

それは、ドラゴンオープの力を宿したフェニックスシステムに

九人の人間の魂を

移植させて、

例え何度

その人間達が滅んでも…

その魂に、

適合

する肉体があれば…

ほぼ同じ記憶と強さを

宿す事ができる

ようにしたのじゃ…。

そして、永遠に近い時を生きる事が

出来たその九人は、

やがて…

ケムダーをしのぐ、

力を得て、ケムダー達を

滅ぼす事が

できたのじや。」

鈴鹿の話を

そこまで聞いたポチは、

（ちょっと待て！  
それじゃあ、  
まるでオレの村を  
焼きはらつた、  
あの悪魔と同じ  
じゃないか！）

昔の事を思いだしてこうと  
鈴鹿から

「？？？どうなされた？」  
…と、  
聞かれたので、ポチは、

「いや…なんでもない。  
それで、まさかフワリが  
そのバンパイアみたいな  
存在だって、言うんじゃ  
ないだろ？」

まさか…と思いながらも  
その事を聞いてみると…

やはり、鈴鹿は、  
一瞬目を閉じてから、  
首を一度だけ横に  
振つて・・・

そのあと、  
ポチを見ながら

鈴鹿御前

「さあの・・・  
少なくとも妾は、  
そのころの記憶が  
ないから、わからぬが  
妾達のもつとも

古記憶をもつ者が、  
ミコーズクレイオと  
呼ばれる永遠の記憶を  
持つ存在だと、

当時の人々に

告げられてあるし...  
それに・・・」

鈴鹿が途中で、

止めた言葉をポチが

「それこ?」・・・と、  
繰り返すと...

鈴鹿御前

「それに、それから、  
約四千年のあいだ・・・  
千年ごとに  
生まれ変わっている  
という記憶が妾達の中に  
確かにあるのじや。」

そう言われて、ポチは、

「ちょ…ちょと待て！  
つまり、フワリの中には  
君のほかに、あと三人の  
前世の人格があるのか？」

そう言つと、鈴鹿は、

「その通りじゃ。」

やはり、そう答え、  
そのあと、せりこ・・・

「そして、  
5人の妾達は、  
ずっと誰かを  
さがすが  
捜しておつた」

そう言つので、ポチは、

「それがオレだつて  
いつのか？・・・つて！  
ちょっと待て！？  
じゃあ何か？  
前世のオレも  
ゴボルトって事か！」

その事に気づいて、  
ショックを受けていると…

それを見た鈴鹿は、

一瞬口元を右手で  
触れて、クスッと笑つて、

「そのよつじやの…。

そなたは、ずっとフワリが想像しておつた  
通りの者だつたので…  
わらわ  
妾も驚いたぞ

しかし・・・

そなたに対しての  
記憶は、

どうやら妾達の

前の方の記憶に

かか  
関わりが

あるよつじや・・・。

そつ言つので、ポチは、

「四千年以上も前の記憶  
なんて想像もつかないな。それより、やつぱりほかの前世の人にも  
意識が  
代わると君みみたいに  
すがたかたち  
姿形が  
変わるのか？」

…と、話すと・・・

鈴鹿御前  
「つむ。

そうじやな・・・  
しかし、そなたが  
思つて いる事とは、  
たぶん、違つと思つわ  
「わ

左手に持つた  
赤い扇子を

そこでバツと広げて

それで口元を

隠しながら

鈴鹿は、

「ポチ殿が、

たぶん今、

思つて いる事は、

姿が術で

類を

見せているからでは、  
ないか?... と、思つて  
あるのだろうが...

... と、そう話し  
そこで、

ポチ  
「違つのか?」

... と、話すポチに

鈴鹿は、口元から  
離しつつ広げた扇子を  
閉じると、  
ポチに、

鈴鹿御前

「見ておれば分かる」

そう言って、スウツ…と  
目を閉じて、  
また目を  
ひらくと…

なんと！そこで紅い目を  
持つフワリの姿になつて  
いるでは、ないか！

鈴鹿御前

「このように妻も  
他の人格も

他の人の目に入る光を  
利用し・・・別の姿に  
見せる事ができるのじゃが問題なのは、  
人格の方で、妻は、  
月の光の力を

借りないと、

出現する事が出来ぬし…

他の人格にも、  
じょうげん  
条件が

そろわなければ、

出現しないレアな者もゐる…  
しかし…変じやの…」

ポチ

「変?」

ポチがやつぱりと、

フワリの姿をした

鈴鹿は、

「フワリには、

無条件に出現できる

二つの人格が、

あるはずじゃが…ぬつ！

そうか！

そういう事か！」「

そこまで言つおいて、

フワリの姿をした鈴鹿は

話を中断

してしまつたので…

気になつたポチは

「…?…?…やつじつ事?」

…つじなんだ?…と、  
聞くと…

フワリの姿をした鈴鹿は

口元に

閉じた扇子の先をつけて  
紅い目を細めながら

「一人は、猫みたいに  
素直じゃない奴じやし  
もう一人は、

唯一の  
男子の

人格であるので・・・

などが得意な妾に

任せた方が

良いと考えたのじや・・・。

頭の中は、そなたの事で  
いっぱいじやから。

あの雪うさぎは・・・」

そこまで、言うと・・・

人格が変わったのか?  
突然

口元から離した

左手と、右手を、  
ガツツポーズのよう  
握りしめて、

「ちょっと!

鈴鹿ちゃん!..」

頬ほおを

うすい紅色に染めながら  
違う声で少し高い声を  
あげるので・・・

その時、確かに

フワリだつた・・・

フワリの姿をした鈴鹿は

再び左手に持つた  
扇子の先を口元に  
近づけて・・・

「そう、照れるな  
眞まことに  
可愛いのう、  
雪ゆきつかぎは・・・」

そう言つて、口元から  
扇子を離してから、

スウツー・・と目を閉じて  
元の黒髪の姿に戻ると・・・

目を閉じたまま、ポチに

「他にも、光を  
利用して、こんな事が  
できるのじや。」

そう言って、  
姿を消したり

そして、また視界に  
現れたと思えば、

肩までとどくぐらいの  
長さだった黒髪を  
背中まで  
の  
伸ばしてみたり

…と、ポチを驚かせたが

むしろ本当に驚いたのは  
そのあとの事で…

髪を伸ばしたままで  
目を開いた鈴鹿は、

バツと広げた  
左手の扇子を  
また口元に近づけ

「それで、そなたが  
一番聞きたがっていた  
稼いでいるか…  
についてじゃが…

どのように方法で、  
稼いでいるか…  
それは…妻達

ミューーズの存在  
そのものに

かか  
関わる事  
なのじや…。」

そつ言つて、開いていた  
紫色の両田を、また、  
スウツ、と、  
閉じると…。

鈴鹿の身体のまわりに…

月の光にも似た

3センチから  
5センチくらいの

青白い光が、ボツボツと  
千にもどどきそつな数で  
たくさん

浮かび上がつてくる…

ポチ

「」・・これは・・・

驚くポチに、

紫色の両田を  
ひひ  
開いた鈴鹿は…

「ある方法を  
もち  
用いて…・・・  
これらを救われない  
まよ  
迷える魂を

正しき方向へ  
みちびく・・・

それが妾達、ミューーズが

存在するもう一つの

理由であり・・

フワリの仕事にも

関わる事

なのじや・・・。

透き通つた

綺麗な声で

そつ告げるのだった・・・。

【Bパートへ続く】

電気がついた

白いフワリの部屋の中

少し前…そこでポチが  
テーブルの前で  
正座しながら…

テーブルの上に置かれた  
お皿を両手にとつて、  
その中にはいった  
ミルクを犬のように  
ペロペロと舌で  
すくつて飲んでいた…。

その様子をテーブルの  
向かいで正座しながら  
見ていたフワリが、

左手で口に近づけた、  
ミルクの入った  
マグカップをテーブルに  
コトンと置いて

フワリ  
「やつぱり、  
その飲み方が  
落ち着くの？」

と、  
尋ねると、

ポチは、

一回両手に持つた皿を  
テーブルに置いて

「ああ・・・

コボルトだからな。  
なんていうか、身体の  
構造が

人の時は、違うんだ」

そう答えたあと

また、両手にもつた皿を  
顔の前まで持ってきて、  
犬のよじペロペロと  
舌で皿の中のミルクを  
すくうので、

フワリが  
頸の方に…

右手の人差し指の指先を  
つけて

「じゃあ…フワリには、  
ポチみたいな  
飲み方は  
でき  
出来ないの？」

…と、話すと…ポチは、

「出来たとしても…。  
お願ひですか、  
それは、止めて  
ください。」

オレと同じ飲み方は、  
駄目です…と、  
丁寧語で  
頼むのだった。

fin

## 第4話【舞姫】Bパート

月の青い光が夜空に  
かがや  
輝く

公園らしき場所の中で、

頭のうしろの方に

蝶結び

にした

青い大きなリボンをつけた  
鈴鹿という少女の身体の  
まわりに・・・

千にも、

とどきそつなほじかくの

青白い光が

浮かび上がっている・・・。

その光の大きさから、

たくさんの  
ほたる  
蛍の光が

浮かび上がっているよつで・・・

少しのあいだ言葉を

忘れて、鈴鹿を見ている

白いジャージを

着たポチに・・・

そこから

1メートルくらい離れた  
場所に立つ、

背中ごとどくくらこの  
長い黒髪をした鈴鹿は、

「命ある世界には、  
どの命にも、かならず  
たましい  
魂という  
やう

光が、宿り、

死ねば、その魂は、  
また別の命に宿る。

・・・しかし、中には、  
あくじ  
悪事などに

身を染そめて、この地に  
さまよう魂も、確かに  
存在する。」

それが業・・・

カルマとも

呼ばれるものを  
宿した魂だと…

説明する鈴鹿に、ポチは

「つまりは、今、  
君のまわりにある  
たくさんの小さな光が  
その、さまよえる魂だと  
言つわけだ・・・。」

そう話すと、

話すポチから、  
約1メートルくらい  
離れた場所で、  
鈴鹿は、

つまつぱ、そうやつて  
魂を、この世から  
卒業させる事を  
もくてき  
目的と、  
している事を話す。

それを聞いたポチは、

「なあ・・それなら、  
その器つて、

身体のつまりからだ

## その魂の器になる

身体つて、  
どこにあるんだ？」

そう言つて聞いてみると

白い靴くつをはいた

鈴鹿は、

「フワリの部屋の中に、  
少し大きな  
オルゴール箱はこが  
なかつたか？」

さっきまで左腰の横の方に下ろしていた  
広げた扇子せんすで

口元を隠すと…

その動作を（またか…）と  
見ていたポチが

「あ・・ああ、  
見た事があるけど…」

そう答えるので、

鈴鹿は、

「あの中には、  
一体の器はいが  
入つて

おるのじゅ。」

…と、

ポチに説明する。

すると、ポチは  
驚いたような

犬の表情で

「うわおおお～ん！」

犬の遠吠えのように  
声をあげたあと…  
さらにポチは、

「いつたい、器つて、  
どんな身体なんだ？」  
と、鈴鹿に  
尋ねるので

鈴鹿は、ポチから  
1メートル  
離れた場所から  
左手の方に持つた、  
広げた扇子で  
口元を隠しつつ

「そうよなあ…。  
最近なら、あの  
箱の中にある  
人工妖精の身体や…今

流行りの…

そこまで書ひと、

ポチ

「まさか…

MOEドールか!?

ポチが叫び声を  
あげるので…

鈴鹿は、広げた  
扇子で口元を  
隠したまま、

クスッと笑つて

「まあそう申すな。  
やはり、いつの時代でも  
気持ちのこもったものが  
一番なのじや。」

透き通つた声で、

そう言つと…ナレで

広げた扇子をパチンと  
閉じて

「さて、もう夜も  
遅いし

帰るとしようかの…」

そう言って、

身体のまわりにある

1000にもどぢくほぢの  
多くの青白い光を  
自分の身体の中に…  
フツヒ、  
しまつてから…

ポチを連れて、  
帰ろうとした、その時！

鈴鹿御前

「危ない！」

突然ポチは、背中を

左手に持つ扇子を  
投げ捨てた

鈴鹿の両手に押されて

前の方に、  
うつ伏せて  
倒れると…

そのポチの背中の上を  
五センチくらいの  
光の弾たまが、

「オッ」と  
通り過ぎていった

光の弾が飛んで来た方から……

「チッ……ミスったか……」  
「……と、

首にどぶくくらいの  
長さの金髪に髪を染めた  
180センチくらいの  
黒いジャンパーを着た  
男が歩いてくる……。

すると鈴鹿は、  
その男の右手に  
はめられた  
金属で出来た手袋の  
よつなものを見て……

「やはり  
マジックハンドか……」

そう言つと、今、  
5メートルくらい離れた  
場所にいる、その男は、

「そうだ。」  
短く答える。

マジックハンドとは、

充電する

までに・・・

手の平の中にある  
発射口

から電気の力で  
約十発くらいまで  
魔法の弾が発射できる。

腕のまわりの部分は、  
ゴムでカバーしている  
金属製の手袋の事である

金髪に染めた男

「今日は、これで  
七発目だが  
あと三発、残っている」

男がそう言つてゐる

あいだに

鈴鹿は、腰をかがめて、  
左手で扇子を  
拾つてから…

背筋を

伸ばして、男を見て

「教えてもらおう……  
なぜ？」のような  
乱暴を  
働く。」

本当に疑問に

思った声で、  
その事に  
ついて聞くと……

白いものを《ズボンの事》

下の方にはいてる  
黒いジャンパーを着た  
男は

「えっ？

だってコボルトと  
子供なんて、弱そうだし  
試し撃うち  
すんのに、  
ちよつと良いだろ。」

やつぱりので、

そのあいだに地に  
うつ伏せていた  
状態から  
立ち上がったポチが、

「最低な理由だ」

ジパングには、なんで?  
こり…

人を批判したがる奴が  
多いんだと考へている  
あいだに

ザツ…と履<sup>は</sup>いてる  
白い靴で…

その手袋をはめた男の  
3メートルくらい前に  
立つた鈴鹿が、

また、バツ…と、  
左手を振る事で  
持つている扇子を広げて

「そうなのか?

しかし、残念じやの。  
先ほどの攻撃で妾に  
魔法を当てる  
唯一の  
チャンスを、  
のがしてしまつたぞ。」

そう言つと…

そんな…人の言う事など  
気にせず髪を染めた男は

「あつ…あつ…」

…と、

短く言いながら

右手にはめた金属製の  
手袋の

甲『手の平の裏の事』の  
ところにある【赤】【白】【青】と、横にならぶ

ボタンのうち

【赤】のボタンを

左手の人差し指の指先で  
押して…。

その手袋の手の平を  
鈴鹿の方に向けると

手袋の手の平の中にある  
発射口のパワーを  
シュウシュウ…と音を  
たてながら  
充電させていく…。

そのあいだに鈴鹿は、

「ポチ殿!…すぐに妾から  
離れるのじゃ!…」

ポチに声をかけて・・・

ポチをさらに

五メートルくらい、

うしろに

下がらせると

そのあいだに

マジックハンドの  
パワーをフルパワーに  
充電させた

髪を金髪に染めた

若い男が鈴鹿の方に  
向けた手の平から・・・

「くわえええーーー！」

3メートル前にいる  
鈴鹿に向かつて、

ボツ・ボシュウウウー！と

約5センチくらいの  
火球を放つ

しかし、その火球は、  
黄緑色の服を着た  
鈴鹿の胸のところを、  
スカツと通りすぎて・・・

そこにいる鈴鹿が、  
スウツ…と、  
消えたかと  
思えば…・・

その右側みぎがわ：

あるいは、左側に  
現れでは消え  
現れでは消えき…と

左手に持つた扇子を  
使って舞まいながら

右手にはめた手袋をさげた男を、  
瞬間移動のようない  
ものを繰り返し…

髪を染めた男

「こ・・これは・・・」

和琴わいんの音や  
横笛よこ笛や  
楽琵琶がくびわなどの  
雅樂がくの音楽と  
共に

黒い靴くつと  
同じ色のジャンパーを  
着た男の目に

自分のまわりに

たくさんの光の花びらが

舞う

花吹雪が

映る。

そこに瞬間移動のような  
ものを繰り返す鈴鹿から

「【幻視<sup>げんし</sup>】瞬動<sup>】</sup>

人の目に映る光を  
利用して・・・

ただの移動を、瞬間移動  
しているようにみせる  
術<sup>わざ</sup>じや。

そして…【心色情転<sup>】</sup>

そこで、瞬間移動のようなものを辞めて<sup>や</sup>

立ち止まつた鈴鹿が

広げた扇子をパチン!と  
閉じると・・・

男のまわりを、

たくさんの光に染まつた

花吹雪が

吹くところから…

男は、鈴鹿が

紡ぎだす

幻想の世界へと入つていく…

そこには・・・

吹く風によつて

たくさんの光の花びらを  
舞い散らす、

大きな木だけがあり・・・

他には、何もなく、

夜空がどこまでも  
広がっている・・・

大きな木があるところに  
立つていた

髪を染めた男が

ふと、足元を見ると・・・

いつの間にかそこにいた

白い子猫こねこが

ニヤーンと、

男を見上げていた・・・

いつもなら右手にはめた  
金属製の手袋の手の平を  
向けて・・・  
光の弾や火の球をぶつけていたところだが・・・

髪を染めた男

「な・なぜ・・・

こんなに

この子猫が  
かわい  
く  
思えるんだ

ばざ)? 攻撃出走

なセ? 攻撃出来なし? と

不思議に思へ男の

ひび  
頭の中に直接、

響くようす

## 清んだ歌声が

どこから、

闇にえひくの・・・

~~~~~

子猫が見てるよ

はなぶさへ

ふう
いて
いる

キラキラひかてる〜〜

三
九
九

わたしをみている

しろいこねこ

ひとみで

みていいよ

おしおしおーしおしおー

まじまじまーじまあじー
めがはなせーなーいー

そして・・現実世界では
180センチくらいの男が
どこか遠くを
見つめながら
じつとして、動かないので
…

5メートルほど
離れた場所から、
その様子を
見ていたポチが、

「なあ、さつきから、
じつとして、
動かないんだけど…。
何か幻覚
でも見てるのか？」

今は、となりに
立っている
鈴鹿に尋ねると

鈴鹿

「まあそんなどいつもじゃ
さて、^{どの}帰るとしようかの
ポチ殿・・・」

やつ・・・ポチにいつので

ポチは、

「こいつは、このまま、
ほつといて
だいじょべぶ
大丈夫
なのか？」

・・・と、

鈴鹿に聞くと、

長いモミアゲをした

鈴鹿は

鈴鹿

「心配ない。

あと3分もすれば、
元に戻るはずじゃ。
それに、元に戻つたら、
違いの分かる男に
なつてあるから・・・
もう^{おそ}襲^{おそ}われる
心配もないはずじゃ。」

そう言つので、ポチは

「あ・・ああ・・・。」

少し^{ヒカル}戸惑い

ながらも、返事をすると

鈴鹿は、

「俊宗様以来、じやな・・・
こつやつて話すのは、
こよひ

今宵は、

家に着くまで
語りあかそうぞ。」

そう言って、
ポチと一緒に
フワリの家へと
白い靴をはいた足を
向けるのだった・・・。

5話へ続く・・・

次回予告

次の日の朝、
フワリの部屋のベッドで
目が覚めたポチは、
そこで太陽の光で
青く光る銀の髪の少女と
出会う・・・そして、
その少女との出会いは…
ポチの新たな旅立ちの
始まりだった・・・。

次回、第5話
→学校への道

ポチ、新たなる人格と
おつかいに行く。

第5話【学校までの道】Aパート

「いは、どうだらう…

月明かりの中、
巫が着るような

赤い袖のある

白い衣装を上に着て、

裾が大きい

赤い袴を

下にはいた

長い黒髪の少女が一人、
立っていた。

その少女、
鈴鹿御前は、

「そろそろ…そなたらも

ポチ殿の前に

姿を見せたらどうじや」

そこにはいる少女と少年に
話すと…少女の方が

？？？

「分かったわよ。

まず、

あたしから、出るわ。」

そう言つので、鈴鹿は、
右手の4本の指先を

口元にそえて、
ブツ・クク・・・・と
笑いながら

影になつている
その謎の少女に

鈴鹿御前

「そなたか…ブブツ…
そなたは、確かに
わかりやすい性格を
しとるから…・・・
ポチ殿も扱い
やすからい…。」

そう話すと、

その影の少女は、

？？？

「うつせい…・・・

・・・と、

声をあげるのだった。

フワリの部屋の中で…
ポチは、

次の日

自分の身体の上に大きなタオルだけ、かぶつて、横向きに寝ていた。・。

フワリは、ベッドの上で寝ていいよ。・と、言つてくれたのだが・。

まだ子供のフワリを、

ゆか
床の方へ

寝せるのは、大人のコボルトとして、許せるものでは、なかつた・。

だから、かぶつていた大きなタオルをとつたポチは、立ち上がり、大きなタオルをたた置むと・・・

その部屋を出て、

そのあと・・・

台所のある居間の方へ歩いていった

そして、

居間の外のところで立ち止まる、

ポチの犬のような耳に

？？？

「いい？フワリ。
こここの味付けは、
魔法のように
自分の感覚を
研ぎ澄ませるの…」

？？？

「そうそう…。
まつ、あんたは、
出来る子だから、
心配してないけど…。
がんばりなさい。」

？？？

「うんうん。

あんたは、素直〔すなお〕で良い子よね。」

居間の中から、

声が聞こえてくる…。

声の主が何者なのか
確認するためには
居間の中に入ると

太陽の光で青く
輝く銀の
長髪の、

頭の左側を青いリボンで

結んで…
頭の左側の銀髪を
テールの形にした…

むらさきいろ
瞳の少女が

台所の前に立つて…
鍋の底そこ
に火をつけて、
何かを煮ていた。

その少女は、右横の方に
顔を向けて、

ポチの姿を
確認すると…

「目が覚めたみたいね…
待つてなさい。
今、作った料理を
持っていくから…。」

そう言って、
また鍋の方を見て、
左手に持つた、
おタマのようなもので、
鍋の中を、
かきまぜていたようなので…
ポチが

「キミは？」

白いワンピースを着た、
その少女にたずねると

？？？

「ゴメン。
自己紹介が、
まだだつたわね・・・。
あたしは、
フワリの前世の一人で
オリエンス＝シルフィード っていうの。
当然、この姿は、鈴鹿と
同じで、光で作つた
幻よ。」

その少女が、
凛とした声で、
そこまでいふと・・・

今度は、違う、
ほがらかな表情と声で、
ポチの方に顔を向けて・・・

「シルフィイちゃんは、
照れやさんで、人前には、あまり姿は、ださ・・・」

その言葉の
途中で
やわらかかった
柔らかかった
表情が元のキリッとした

顔になり

シルフィ

「もういい。もういい。
みなまでいいうな。」

… そう言つたかと思えば

またフワリの表情になつて

「それで、シルフィちゃんは、風の精靈のモデルに、なつた人んう」

そこまで言つと、また…

猫の ねこような目を

したシルフィの表情に

変わり

「はいはい。

それは、あとであたしが
話すから…」

ているので

ポチの

「仲良いんだな。」

ひとつでも

シルフィが、

また鍋の方へ視線を戻し

そんな様々《やまとやま》なやつとつをし

「そんなに良くな
ないわよ。」と、皿えび

フワリが

「それはないよ。

シルフイちゃん。」

そう皿えびを返し

ホチは
(素直じゃ
ない・・・か・・・)

でも、息ぴったりだ……と

また左手のおタマで
鍋の中の料理を
かきまわす
シルフイの姿を見ながら
思つのだつた・・・。

・・・・・・・・・

それから、

テーブルの上で

シルフイが、
少し底の

深い皿に盛つた

ボルシチという料理を
食べたホチは・・・

正座するポチと

テーブルをはさんで

向かい側で、

あぐらをかいてる

シルフィに、

「そういえばや・・・」

と、
はなし

話を、

きりだそうとした時…

シルフィから

「わかつてゐわ。

器に

魂を入れるとこが

見たいんでしょ。

その前に、まず使つた

食器を

かたづけましょ。」

ポチの言おうとしていた

事を、先に口にしたので

ポチは

「あ…いや…ああ・・・」

まずは、

両手に持つた皿に

シルフィが使つた

スプーンを

乗せたりして…

シルフィの言う通りに
テーブルの上にあった
食器を全部かたづけると

「じゃあ、

フワリの部屋に行くわよ
そうシルフィに
言われたので
ポチは、

「あ・・ああ・・・」

…と、居間を出て、
シルフィのあとをついて
いった

フワリの白い部屋
白一色の部屋の中に入った、
シルフィは、部屋の
隅の方まで
行って…

部屋の中に、
続けて入ったポチに、

シルフィ

「テーブルに座つて…」

そう言つて

それに対してもポチが

「あ……いや……そうだな」

…そう言つてゐるあいだに

シルフィイは両手で、
そつと・・・
大きな木箱の
フタを開けて、
フタを、置いたあと…

木箱の中から、

背中に蝶のよ^うな
一枚の

白い羽^{はね}のついた
背中にとどくぐら^い長い長い
紅い髪の35センチくらい
の身長の女の子の
人形を、

両手で、取り出すと

それを、

正座しているポチがいる
小さなテーブルの方に
持つていって・・・

テーブルの前で、

あぐらをかきながら…

テーブルの上に、その

縁のドレスのような

ものを着た、

妖精型

のホムンクルスの器を、
置いて・・・ポチに、

シルフィ

「じゃあ、

声を出さないで・・・

見ててね。」

そう言って・・・

テーブルの

向かいで正座するポチが
首を一度、縦に
振るのを確認すると

シルフィ

「じゃあ、始めるわよ

目を閉じて

精神を集中させる・・・

すると、シルフィの
身体のまわりに
太陽のせいで、色が
うすくなっているものの
鈴鹿のまわりに
浮かんでいた、

1000にも近い数の、
あの青白い小さな光が
あらわ
現れて、

シルフィイが、
手の平を広げた左手を
上方に伸ばすと

そのかざした
左手の平に

青白い魂の光が一つ、

吸い込まれていく

すると、

その左の手の平が、

突然

青白く光り始め

あぐらをかいた

シルフィイは、

自分の前のテーブルに
仰向けに置いた

あの小さな器の上に
自分の輝く左手をかざす

すると・・・

シルフィイの左の手の平が
光を失い・・

変わりに出てきた

あの小さな青白い光が…
仰向けに置かれた器の

胸のところに

吸い込まれていく…

それから、

いつぐらいだろうか…

あの仰向けに倒れていた
小さな妖精の、

右手の指の何本かが…
ピクン・・ピクン…と、
動きだしたのは…・・・

やがて…その妖精は、
起き上がりつて、

テーブルの上に立つと…

シルフィイの方を見上げて

？？？

「あう…えう…あうあ…」

言葉にならない言葉で
話しかけてきたので…

それを見たポチが、

「言葉は、

まだ話せないのか?「

その事をたずねると、

シルフィイは、

「魂たましいは、
脳のうじゃないから

記憶きおくが

あるわけじゃないわ…

だから、

どんな魂たましいであるうと…
器いきに入れた時は、
みんな、赤ん坊と
同じなのよ…。」

そう…ポチに言つたあとで
生まれたての妖精の
顔の前で…・

シルフィイ

「眠りなさい。」

ス~ツ~と、

左手の人差し指の指先を
左、上、右、下、左…と

そんな円を

何回も
描いて、

テーブルの上に立つ

妖精を眠らせて…・

テーブルの上に仰向けに
倒れさせると・・・

その白い蝶の羽をした

妖精を・・・

両手の手の平で、
そつと・・・
すくい取つてから、
立ち上がり、

それから部屋の
隅の方まで行つてから・・・

両手の手の平で、
すくいとつた妖精を

蓋のフタの
空いた木箱の
底の方に入れると、

それから・・・

木箱が置いてあつたところの、すぐ近くにあつた
工具のこう

ドライバー左手に持つて・・・

その左手にもつた

ドライバーで、

妖精の入つた
はい

木箱の
すぐ側に

置いてあつた木箱のフタを
ブスツブスツ・・・と、

何回か突き刺して

木箱の蓋に

何か所か

穴をあけてから

立ち上がって、

そのドライバーを
元にあつた場所に

戻し・・・

それから、
部屋の隅の

方である

その場所の
近くに置いていた・・・

何か所か穴をあけた
その木箱のフタを使って

木箱のフタを閉じると・・・

シルフィは、
それを両手に

挟むように、
抱えて、

立ち上がり、ポチに

シルフィ

「じゃあ、これから
これを、持つて行くから
良かつたら、
ついて来る？」

そう聞いてくるので

ポチは一回、
首を縦に振つてから

ポチ

「ああ・・行くけど・・
いつたい…どこに、
行くんだ？」

そう言って、
立ち上がると…

シルフィは、

少し考えた表情で
上を向いて・・・

それから、

少し考えこんだあとで

ポチの方を見て

シルフィ

「そうねえ~

簡単に言えば、

ペットショップみたいに、この魂が入った

生きている器を

管理してくれる

ところかな?

ペットに例えて

言えば、あたし達は、

そこのブリーダー

みたいなものだから……

そう話して……

そのあとポチに、やうこ

シルフィ

「じゃあ、あたし
箱を抱えてるから、
先に行つて、
ドアとか開けてもらつて
良いかな?」

そう頼んで、

ポチが

「分かった。
先に歩いて、この部屋や
玄関のドアの

開け閉めを

オレがやれば

良いんだな？」

そう言つと、

木箱を両手に持つた
シリフイは、
立つたままで

「ありがとう。玄関の鍵は、
そこの左側の方の
えもんか
衣紋掛けに
かかつていて、
黄緑の服の
ポケットの中にあるから
玄関を出る時に
頼むわね・・・。
あとは、あたしが
せんこう
先行する
から、あなたは、
あとから、ついて来て」

そう言つて、

それに対してポチが

「分かった。」

…と返事をして、

言われた通りのところへ

行って・・・

黄緑の服のポケットから

キー ホルダーのついた

玄関の鍵を

右手で取り出すと、

シルフィ

「じゃあ、行きましょ。」

そう言って、

木箱を両手で持つて

歩こうとする、

シルフィの前を

ポチが
先行して

歩くのだった・・・。

【Bパートへ続く】

第5話【学校までの道】 Aパート（後書き）

太陽が照らす歩道の上を
白いジャージを着たまま
歩くポチが

白いワンピースのような
ものを来て
銀髪の頭の左側を
青いリボンで
結んだ少女
シルフィと
一緒に
歩いていた……。

ポチは・・・
40センチ四方の
木箱を両手に
抱えて、

先を歩く、シルフィに、

ポチ

「とこうでさ。

シルフィも大和姫も
ジパンングの言葉を
話せるって事は、
ときどき、こうして、
姿を変えたりして、
ジパンングの言葉の

勉強をしてるのか?「

：「そう言つてシルフィイは
顔を一回、
横に振つて

シルフィイ

「そうじゃないわ。
あたし達は、一つの頭に
いくつもの意識が
共有^{きょうう}してゐる^{いる}から
してるようなものだから

フワリが
ジパングの言葉を
覚えれば、
自然と私達も
その言葉を覚えるのよ」

つまりは、フワリの
能力^{のうりょく}

「『イコール』自分達の
実力なのだ」と話すので
いつの間にかシルフィイの
右隣を歩いていた
ポチが

「じ…じゃあ
エッチな本とかも…」
そう言つと

シルフィイは、顔をポチの
いる方へ向けて

「なあ、

言いたい事は、分かるが、とりあえず
変な想像は
止めないか?」

箱を持って歩きながらも
猫のような目で、
じい～と
ポチを見るのだった。

fin

第5話【学校までの道】 Bパート

太陽が照らす歩道の上を
白いジャージを
着たまま歩く、
コボルトのポチが、

白いワンピースのような
ものを来て
銀髪の頭の左側を
青いリボンで
結んだ少女
シルフィーと一緒に
歩いていた・・・。

ポチは・・・
40センチ四方の
木箱を両手に
抱えて、

先を歩く、シルフィーに

ポチ

「なあ、髪を
両側で
結んだものを
ツインテールつて、
言つんだよな・・・。」

ポチが、そう言つので、

シルフィイが、
「 そ う だ け ど … そ れ が
ど う か し た の ？ 」

そ の 事 を
尋 ね る と、

ポ チ が

「 い や …

シルフィイ み た い に

片 側 だ け

髪 を 結 ぶ の は、

な ん て

言 つ ん だ ろ う な … … と

思 つ て … 」

そ う 言 つ の で、
シルフィイ は、
木 箱 を 両 手 に 持 つ て、
歩 き な が ら … …
顔 を あ げ て

「 う ん。

な ん て 言 つ の か な あ ?
ワ ン テ ー ル ? ?

… と、 言 つ と

そ こ に ポ チ が、

「テールは、
尻尾つていう
意味だろ。」

そつとひいてるので、

歩きながらシルフィイが、

「やのよひな・・・。」

…といつ返事をすると、

ポチが

「じゃあ、シルフィイは、
左側をテールに
してゐから・・・。
ここは、男らしく
左しつぽとがひなよひ」

勝手に、

そんな提案をするの

両手に木箱を抱えて歩く

シルフィイは、

一度、立ち止まって、

「おこ・・・。」

・・・無表情な顔で、

うしろで歩いている
ポチの方を見るのだった

道路の
歩道側ほどうがわ

180センチくらいある
白いジャージを着た
コボルトである
ポチの前を・・・

青く光る銀髪の

頭の左側を青いリボンで
結んで

テールの形にした

90センチくらいの少女が

木で出来た箱の下を両手で支えながら
青い靴で歩いていた

しかし、もう、これで
何回なんかいめ

どうか・・・

ポチが、

その少女シルフィーに、

ポチ

「なあ、持とうか…」

…と、

声をかけたのは…・・・

半分近くある、

その木箱を
挟むようにして

抱えていた時とは、違い

今は、箱の下を両手で
支えているので、だいぶ
無理があるのだ…。

ポチ

「第一、

その持ち方だと

前が見えないだろう。」

ポチが何度も

シルフィ

「大丈夫よ・・・。
気配で、

人や自転車が来た時は、
分かるから・・・。
まわりに迷惑は、
かけないわ。」

…シルフィがそう言つて

聞かないの

もう、ポチは、頭の中で

（でも、もう、だいぶ、
息があがっているぞ…）

今、見ている

シルフィイの姿が
まぼろし
幻とはいえ
ポチから見れば、
大きな箱を持つて
歩いてる小さな
女の子なので

思わずポチは、

「田的で地つてあと、
どれくらいなんだ？」

・・・と聞かずには、
いられなかつた。

すると、シルフィイが…

「わ、そろそろ、
見ても良いはずよ。

ヘルメス学院ヒノモト校が…」

…と、告げられて、

そりに先に進むと…

やがて…ポチの日に
白黒ながら
ヘルメス学院が
見え始めた…

ヘルメス学院

そこは…
とても広い場所だった…

学院の門から入った

ポチが

「遊園地より
広いんじやないか?」

…と言つてしまつほどこ

そんなポチの言葉に…

木箱を持ちながらも、
先を歩く…シルフィは、

「当たり前よ。

ここには、

生徒に**ねんれいせい**しての
年齢制限が**ねんれいせい**いから…

子供の生徒だけじゃなく
大人の生徒もたくさんいる…
それに、あなたみたいな

ヒューマン『人間の事』
じゃない人も少數ながら
いるみたいよ。』

「そうなのか？」

そう話すので
それを聞いたポチが

「そうなのか？」

・・・と、

言いながらも頭の中で…

ポチ

（オレみたいに悪魔に
呪いをかけられた
人間が、他にも
いるって事か？
いや・・・もともと、
そういう人間もいたつ
うわさもあるしな…）

そんな事を

考えているうちに・・・
いつの間にか
立ち止まっていたらしく

箱を持つて
先を歩いていた
シルフィイが顔を
ポチの方に

向けようとしながら

「うひひひ、そこー、
立ち止まってないで
わざわざと行くー！」

そう言つと、

それを見ていたポチから

ポチ
「おい…足元…」

そう言われても
気付いた時には
すでに遅く…

木箱の下を両手で
支えながら
歩いていたシルフィは、

地面に埋まつっていた石に…

右足に履いていた
方の青い靴のつま先が、
ぶつかって、

「あやあつ。」

スッテーンーと前方に

転ころんでしまった

そのせいで、中に
妖精型

のホムンクルスが
入つていた
40センチくらいの木箱は
さらに前の方に
投げ出され……

シルフィイは、
前の方に
両腕を
伸ばした……

漫画みたいな
見事な
痩こけかたで

うつ伏ぶせて
倒たおれてしまった

ホチは
「大丈夫か！」
・・・と、うつ伏せに倒れたシルフィイに
駆け寄よろうとするが……
その途中で

シルフィイ
「来こないで！」

：顔を上げたシルフィに
言われて、ポチが
立ち止まると・・・

シルフィ

「一人で、立てるから」

・・・そう言われたので
ポチは、シルフィが
立ち上がるあいだに・・・

ポチ

「分かった・・・。」

：投げ出されたせいで、
中から飛び出した妖精を

蓋の取れた

木箱の中に入れたあと

はず
外れていた
蓋を、

また木箱の上に
かぶ
被せてから・・・

また、その木箱を両手で
持つと・・・

衝撃を

しょうげき

与えた時に…
目を覚ました妖精が暴れた事で、
あは

箱の中からドンドン…と
軽い衝撃と音がするので
ポチは、

「これは…
いそ
急需だ方が、
良いな…。

オレが持つていくから、
シルフィイが、先行して
みちあんない
道案内

をしてくれ…。

立ち上がった、
シルフィイに向かって、
そう言つと…

シルフィイは、ポチに、
顔を見られないよう…
さつさとポチの前を
歩きながら…

シルフィイ
「ゴメン…。
そうしてくれる?」

…普段「ふだん」と違つて、消えいりそつな声で
そう答えるので…。

気になったポチは、歩く速度を上げて…

「どうした?」

木箱を両手に
抱えたまま、

チラツと、

シルフィの横顔を
見てみると…

ポチ

「泣いてんのか? お前」

涙を紫色の両目に、
溜めたシルフィの
横顔が見えたので、
そう言うと…

シルフィは、左腕で
両目をゴシゴシ
擦りながら…

シルフィ

「泣いてなんかないわ。
これは… そう…
あせ汗よ!」

そう言って、

トテトテ…と
逃げるように…

歩く速度をあげて、
またポチの前を歩くので

ポチは、そのまま、
シルフィのうしろを
箱を持って、歩きながら

ポチ

「なんで？そこまで
意地に

なるんだ？」

・・・と、

聞いてみると、

シルフィ

「だつてさ・・・
こんな荷物一つ運べないような

女が、風の精霊の
元になつたつて、

知つたら、みんな

ガツカリするじゃない？

だから・・・
せいれいしんじゅ

精霊信仰とか、してる人達に

申し訳なくて、

そのあと、

両肩を少しだけ
震わせながら

シルフィ

「ああ！ もおー！

なんで、こう

不器用

なんだろ！

あたしは・・・

そう叫んで

一人で葛藤

していたので・・・

歩きながら、その背中を見ていたポチは、

「まあ、どんな人間だつて、理想通りには、なかなかいかないものさ・・・。

だからさ・・・

急がないで、

着実に

一步ずつさ・・・

理想に向かつて

歩んで

いこうな・・・」

すると、シルフィは、
また、両方の肩を
震わせながらも・・・
今度は、プツ・ククツと
笑つて・・・

シルフィ

「ふはははは・・・
あんたも良くな笑わないで、そんな恥ずかしい
セリフがいえるわね！」

シルフィが、

うつ向きながら、笑っているのが、
背中から見えるので

ムツとしたポチは、
両手に木箱を
もちながらも

「し…仕方ないだろ！
言つてるオレも、
死ぬほど恥ずかしかった
んだよ！」

シルフィの後方を
歩きながら、
恥ずかしそうに
そう言つと・・・

シルフィが

「あなたも、良くなあたしに構うわよね…。
何で？」

その理由を聞いてくるので…

先を歩くシルフィイの
背中を見ながらポチは、

「あ・・いや・・・何だ、そな・・・つまりだ。
シルフィイのその考え方が
嫌いじやないからさ…」

照れくさそうに、
そつ話すと、

それを聞いたシルフィイが

「素直に好きって言え」

前を歩きながらボソッと
そう呟いたの
だが…

ポチには、良く聞こえず

ポチが

「へつ？」

何か言ったか？

そう聞いても、
シルフィイは、一度

「なーなんでもないわーそ…空耳よ。きつとー！」

そらみみ

そう言つて・・・

それを聞いたポチも

「 そうなのか？」

そう答えて、

その話は、

一度、終わつたのだが・

少しだすると・・・

歩きながらも、

そおつ・・と、ポチのいる

後ろを見た

シルフィイが

「ねえ・・聞こえた？」

また、そう言つてきたので・・・

ポチが、
少し揺れる
木箱を両手で
抱えながら・

「 なあ、ホントに
なんか言わなかつたか？」
そう聞いては、

みたものの、シルフィイは

「え…えっと…あの…
その…そつ…風の音。
えっと…風の音よ…。」

ブイツと前を向いて
歩きながら…。
そう答えるので、

ポチは、

「そ…そつか…！」

氣のせいか…。とい、

シルフィイと話を

していった時に
遅くなつた
歩行速度を、また、
速めるのだった

・・・・・

それから、

目的の場所に向かつて、
少し歩いていると…。

ポチの前を歩いていた
シルフィイが

「はあ…良かつたあ。
今日は、生徒達に
会わずにすんだわ…。」

急に、

そんな事を言つたので、

ポチは、

「生徒達と何か

あつたのか?」…と、

聞いてみると、

シルフィイは、

「何かあつたつて訳
じゃないけど…」

「だつて、あの子達、
あたしの事を…。
勝手に

両肩を震わせながら

「だつて、あの子達、
あたしの事を…。
勝手に

ミヤアちゃんとか、
タマちゃんとか

名付けたりして

猫扱い

するのよ…。

あげ句の

はてに、

あたしの喉を

指先でコロコロ

撫でたりして…

ホント、失礼しちゃうわ。

そう話すので、

ポチは、
バウツ…と、
吹きだしてしまい

シルフィ

「笑うなよ。もおーー！」

一瞬
いつしゅん

うしろの方を見て
そのあと、フン…と、
前へ視線を
もど
戻して、

歩く速度を速める

シルフィに・・・

ポチ

「『メン』『メン』・・・」

と、

謝りながらも

頭の中では・・・

(ちりぢやいし…
ホント猫っぽいから、
つい…からかいたく
なるんだろうな…)

…と、

そんな事を考えながら、

シルフィのあとを
追うのだった

そして、それから、
さらに少し歩いて…

心靈科学研究所

もくてきち
目的地に
たどりついた

ポチは

「ここか…」

両手に木箱を抱えながら

その外見が、

少し黒っぽい鉄の色をした…

半球形の大きな建物を

見上げていた…。

入口の側には、

白いワンピースを着た
シルフィイが立つていて…

そして、ポチが、研究所の入口である
その白いドアの前に立つと…

シルフィイが、

「箱は、もう揺れ
なくなつた?」

そう聞いてきたので

ポチ

「ああ…少し前から
おとなしくなつた…」

ポチが言つと…
シルフイは、

クルリと、

ポチに背中を向けて、

「ほ…ほほほほんと、
いろいろ助けてくれて、
その…なんだろ…・・・」

両肩を

震わせながら、

何かを話そうとしてるのでポチが、

「いや・・・

何を言おうとしているのか
分かつたから・・・」

無理をするな…と、
言おうとした時

シルフイ

「つまり…

感謝してゐつて

言つ事よ…・・・」

ひらき直つた

ようにな・・・

シルフイが話すので、

両手に木箱を抱えながら

ポチが

「いや・・・
オレも、シルフィいや、
フワリに
世話になつてゐるから
あたり前の事をしただけ
だつて……」

こつちこじや、いつも
ありがとうな・・・と、
シルフィのうしろ姿を
見ながら話すと、

その前でシルフィは、

恥ずかしそうに頬を薄い紅色に染めながら・・・

「素直に返すなよ。
たいおう
対応に
こまるじやないか・・・」

そつと、フッ・・・と、
フワリの姿に変わり

フワリは、桜色がうすく
かかつた白い髪を
フワッと、揺らし
ながら・・・
振り向いてポチを
見上げると・・・

「シルフィイちゃん・・・
ポチに感謝かんしゃ」

されて・・・

とっても、恥ずかしかったみたい・・・

それでね。ポチ・・・」

次の瞬間しゅんかん

ポチは、

思わず息を飲んだ

フワリ

「まつ、ありがとね・・・

だつて・・・」

なぜなら・・・そういつ

フワリの姿に、

優しく

微笑む

シルフィイの

面影おもかげ

重なつたから

だつた・・・。

6話へ続く・・・

第5話【学校までの道】 Bパート（後書き）

次回予告

心靈科学研究所

その入口である

ドアの前で、

木箱を持って立っていた

白いジャージを

着たポチは

その側で、
そば

ポチを見上げる

白いワンピースの
ようなものを着た
フワリに

ポチ

「なあ、シルフィって…
たまに、背中を向けて
話すけど…
どうしてなんだ？」

その事について聞くと…

頭のうしろの方に、
ちょうむす
蝶結びに

した

青く大きなリボンを
つけたフワリが、

「シルフィィちゃんつて…
照れると、そっぽを向く
クセがあるの。」

「…と、

そう話すので、ポチが、

「…そりなのか?」

「…と、

もう一度、聞くと、

フワリは、

「うん。そりだよ。」

・・・そり答えたので、

ポチ

「ここで、フワリに
変わったのも、
恥ずかしかった事が
理由なのか?」

「…と、

聞いてみると、フワリは
自分の顎あごに

左手の人差し指の指先を
そえて・・・

「うーんと・・・
違うみたい…ここに
苦手な人がいる

みたいなの・・・。」

そつまづので、

ポチは、

「苦手な人・・・」

そう・・・つぶやきながら、

頭の中で

（すべての答えは、

このドアの中か・・・）

このドアの向こうにいる
シルフィイが苦手な人物と
いうものに思いを
めぐらせるのだった。

はたして、シルフィイが
苦手な人物とは・・・

次回、第6話

【サイレントキル】

お楽しみに・・・

第6話【サイレントキル】プロローグ

海の星アクアマリン・・

この星でも中部にある
地域では、
紛争があつた・・。

中近西、戦場へ

多くの家が炎に包まれた
夜の戦場に・・

緑色のガスマスクを
頭部につけて…
緑のボディースーツで
全身に身を包んだ男1^つが、
右手に銃を持つて、
立っていた・・・。

その足元には、
黒い衣服を着た
髪の長い女性が、
血の海にうつぶせて
倒れている・・・。

その緑色のボディースーツを着た男1の
七メートルほど
離れたところに・・・

ザツ・・・

黒いプロテクターのようなボディースーツを着た
少し髪の長い青年Aが
現れた…。

そして…・・・
現れた途端…
青年Aは、
右手でナイフを
握つたまま、

緑のガスマスクをつけた
男1の方に向かって走り
そこで走つてくる、
青年Aの存在に気づいた
緑のボディースーツを着た
男1が右手に持つた
黒い銃を
青年Aに
向けようとした時！

青年A
「遅い…」

青年Aは、右手に持つた
ナイフの刃をブスリと…

緑のボディースーツを着た
男1の心臓に突き刺し…

男1は、右手に握った
銃の引き金を
引く事なく
絶命し…

青年Aが男1の左胸から
右手に握ったナイフを
引き抜くと…

男1は、
右手に銃を握ったまま
その場に、

くずれ落ちるようにして
うつぶせに倒れた…

青年A
(これで一人…)

だが青年Aは、すでに
気づいていた…。

敵の数が、

これだけでは、ない事に

青年A
(右側か…)

青年A
(右側か…)

距離は、

およそ十メートル前後)

おそらく、敵は、青年Aの存在に気づいて…
銃の引き金を引くところ
だろう…・

それから、青年Aは、

男1の身体から
引き抜いたナイフを右手に
その敵のいる場所へ
向かつて駆け出し

やがて…・

男1と同じガスマスクと
ボディースーツをつけた
その敵の男2が

両手に構えた銃で
自分の頭部を狙つて
いる事に気づく…・

それを見て、

(しめた!)と、
思った青年Aは、

敵の男2が銃の引き金を
引く1秒手前で…サッと
頭だけを下げる

パーン！！と銃声が
聞こえた時に
自分の後頭部から
後ろの首筋にかけて
熱が伝わるのを感じる…

それは、おそらく、
頭部を狙つて
放たれた
弾丸が…
そのすぐ上を
通過したから
だろう…。

その事に男2が
気づいた時には…
その男2の視界にすでに
青年Aの姿は無く…

次の瞬間

その男の首筋に…
男2の背後にまわった、
青年Aの
右手に持つた
ナイフの刃が当てられ…
そして…

シユパツ！…
シユパツ！…

痛みを感じる

暇もなく男2の首に
一筋の

赤い線が走る・・・。

それから、青年Aは・・・
仰向けに

倒れようとすると男2を
盾にして、

身を隠し・・・

パン！・・・という

銃声と共に別の方向から飛んでくる

弾丸を男2の身体を
使って防ぎ・・・

銃声が聞こえた方へ
男2の死体ごと身体を
向けると・・・

青年

（距離は、十メートル
ちょっとか・・・）

銃を発砲した

敵の男3との距離を

9メートル・8メートルと
詰めていき・・・

7メートル付近でパーンと もつ一度、身を隠している
死体の身体で銃の弾丸を
受けたあと…

青年A

(この距離なら…)

身を隠していた死体から
離れると…・・・

ガスマスクをした、
敵の男3の身体めがけて
右手のナイフを、
ビュンと投げつけた！

すると・・・

そのナイフが刺さつた
男3の左胸から、
ブシュウウーと、
赤い血が吹き出し・・・
緑色のボディースーツを
着た男3は、
その場でドサツと
仰向けに倒れた。

青年A

(これで…終わつたか…)

そう思つた時、青年Aは、背中に人の気配を感じた

青年Aは、パツと、

青年A

(十メートルくらい先か
ナイフを取りに行く
時間を考えると・・・
さすがにヤバいな…)

絶対絶命だと思った、
その時・・・

パン!!

銃声が聞こえて、先ほど
青年Aが感じた
けはい 気配が消える

青年A

(敵か?それとも・・・)

青年Aがナイフを取りに
戻ろうとしているうちに

銃声が聞こえたところの
奥の方から聞こえる
足音がザツ、ザツ…と
大きくなり

???

「さすがのお前も
今のは、ちょっと
あぶなかつたようだな」

黒髪の青年Aと同じような黒いボディースーツを着た

銀髪の青年Bが

近づいてくる……。

青年Aは、その青い目で
肩までとどくくらい長い
銀髪をした青年Bを見て

青年A

「スレイブか……髪切れ。

お前……」

「そう言うと……

腰の右側に
拳銃を差した

長い銀髪の青年Bは、

「あぶないところを
助けてもらつて、
いきなり、それかよ……」

そう言ってから……

ハアツ……と、
ため息を吐いて……

そのあと、

青年Aが倒してきた
三人の男の死体を

見渡すと

青年B

「しかし、ここから…
魔女狩りを
してる奴らだよな…
そのわりには、
銃を撃つ時とか…
素人くさく
なかつたか?」

青年Bがそう言つと…

青年A

「魔女狩りだからだ」

…と、青年Aが言つので

青年B

「どうこう事だ?」

…と、青年Bが

青年Aに聞いてみると

青年Aは、

「こじつり、ガスマスクのよつなものをつけてくるけど…
おそらく、その中には、
魔法使いを発見するための装置みたいなものが、
ついているんだろう…
それに…」

そつ言つて、そのあと

青年Bが

「それに？」

…と、青年Aが言つた事を繰り返すと…

青年A

「素人を

なめない方がいい…

最近の素人の中には、

戦闘に関する

知識がオレやお前を上回る奴もいるし…

何より殺す時に

躊躇がない…オレもお前も

油断をすれば

殺されるぞ…。

青年Aがそつ言つと…

青年Bは、広げた両手を

肩のところまで

上げながら

「戦争のプロのオレ達を

上回る

素人がたくさんいるって

事か…

おお、ヤダヤダ。」

そつ語つと…青年Aは、
青く輝く月を
見上げながら…

青年A

「まあ、

そういう時代だから
彼女らは、ふたたび
現れたのだろう…。」

そつ話す…青年Aを…

青年Bは、

「ミコーズか…
単なる伝説だと
思っていたのに、まさか
実在したとはな…。」

そう言って、

その青い目で

青年Aを見つめる…。

その視線の先で、

月の光に照らされながら
月を見上げる青年

スコール＝クールアイの
姿は、どこまでも幻想的な美しさを放つていた…。

第6話【サイレントキル】プロローグ（後書き）

亜人種について…

ポチのようなコボルトも
この亜人種に族するが…
亜人種が生まれる理由は
大きく二つに分けられる

自然発生種

このアクアマリンの
世界は、魔法などが
生まれている事からも
分かる通り…
意思が世界に及ぼす
影響^{きわ}が私達の世界よりも
極めて高い…

それゆえ…

人の飼い犬などが
人の姿を見て…
人のようになりたいと
思い続けた場合。

その飼い犬自信は、
無理だが
2代3代と続していく…
その犬の子孫達の
脳などに、その考えが

影響を与え、

やがて、それが身体にも
影響を与えて

人の姿に近づいていく
…という説がある…。

この進化の早さは、
この星だからこそ
考えられる事だろう…。

突然変異種

これは、ポチみたいに
魔法で姿を変えられた
ものと…。

人によつて作られた
人工のものと
二つに別れている…。

なお、ポチみたいに
魔法で姿を変えられた
亜人種と違つて、

人工の亜人種は、
人間達に逆らえない
ように、脳に
刷り込みをされ
いるので…。
人に対しては、

エリナリでも逆襲である…

第6話【サイレントキル】Aパート

“心靈科学研究所内部”

そこは、
コンピューター や
魔法の研究をするための
設備がたくさんあり…

今は、10人くらいの人が
自分達に割り当てられた
場所に立つたり、
座つたりしている…。

そこに白いジャージを
着た…コボルトである、
ポチと

ポチの半分くらいの
身長で…

白いワンピースを着た、
フワリが
入つてきた…。

両手に、妖精の入つた
木箱を持ったポチは、
となりに立つている

フワリに・・・

ポチ

「なあ、この中の妖精は
誰に渡せばいいんだ…」

両手に

抱えた箱を

見下ろしながら、聞くと

肩くらいまである、

うつすらと桜色がかかつた白髪しらかみをした

フワリは、

「ここの一番エライ人」

…と、

ポチに、そう言つたあと

研究員のところに行つて

フワリ

「クールアイ所長に
用があつて、
来たんですけど…・・・」

所長は、どこですか?と

立ち仕事をしている・・・

その白衣を着た研究員に
聞くと・・・

その研究員は

「所長に何か」用があるんですか？」

「…と、

逆に聞こえたので

フワリ

「シルフィちゃんが来た
…と、所長に言って
もうえんばかりか
思うんですけど…」

フワリがそう言つと…

その研究員が

何か思い出した

ような顔で

「ああ！

あなたがシルフィちゃん
ですか…！」

所長は、たぶん、この
右側に見えるドアの中に
いると思うので、
行ってみてください。」

そつぱりので…フワリは

「ありがとうございます。」

…と、

その研究員の前で
ペコッと頭を下げてから

ポチのこよとじゆまで
もどるとじやだつたが…

その途中で

足を止めて…

姿は、フワリのままだが
キリッとした表情になり

「ちよつと、フワリ…
あんた、また、
あたしの
名前を使つたな。」

シルフィイの
凛と

した声になつたと思えば

次の瞬間

「ゴメンね。

でも…あの所長さん…
シルフィイちゃんの名前を
出さないと…
中に入れてくれない事があるんだもん。」

フワリのほがらかな声に
変わり・・・

それを少し離れたところ
から見ていたポチが

「おい！まわり・・・」
と、

声をかけなければ
まわりの研究員達に

フワリ

「あっ・・・」

ずっと、注目されたまま
かも、しれなかつた・・・。

それからポチのところに
戻つたフワリは・・・

妖精の入つた木箱を両手で抱えたポチと
一緒に

フワリが研究員に聞いた
研究室のドアを開けて・・・

その研究室の中に入つた

フワリ
「うわー。」

ポチ
「こ・・・これは・・・」

午前中では、あるものの
電気がついてないせいです
ちょっと、
うす暗い研究室の中に
入った、
二人の目に
まず入ったのは・・・

大きな容器の中に
入れられた
薄い赤の
液体の中で
コポコポ…と
膝を
抱えたまま
浮かんでいる
少女の姿だった・・・。

しかし…
その容器の中の
液体の中で浮かぶ
その少女の姿に、

ポチもフワリも
見覚えが

あつた・・・。

ポチ
「この子…シルフィに
似てないか？」

ポチの言葉に、フワリが
ウンウン…と、首を二度

縦に
振つて
頷いて
いる

そこに・・・

？？？
「誰だ！？」

黒衣に身を

包んだ黒髪の青年が
研究室の奥から、
ポチ達のいる場所へと、
近づいて来る・・・。

そして…少し長い黒髪の
その青年は、
現れた途端に
そのサファイアのような
青い瞳で

フワリの方を見て、

？？？

「 酔つかれか…
お前に用は無い…
だから・・・早く
シルフィーさんを出せ。」

やつぱり…

フワリは、
ちよつと困った顔で

フワリ

「 いめんなさい…
ホントに言こにくいんですけど…
シルフィーちゃん、今
出たくないそう
なんです。」

…と、

そう…話すのだが、
そこで、その黒衣の
美しい姿をした
長身の青年が、

「 フッ…では
学校行きの話は、
どうなつても良こと…」

やつぱり…

ポチが

(学校行きの話?)

…と、

考えているあいだに

フワリが

「そ……それは、
困ります！」

シルフィイちゃん!!

出できて！…と

シルフィイに呼びかけ、

次の瞬間。

シルフィイ

「わかつたわよ！
もう！」

その声と一緒に
シルフィイの姿に変わると

いつの間にか…

黒衣の美しい青年が、
ネコミミのついた
ヘアバンドを
両手に持つて

「これをつけってくれ。」

…と嘆息の声で、
シルフィイは、
無表情な顔で、

「出てきた途端ひとたんいきなり、それか…」

そう言って、
話を進めるのだった…。

それから…シルフィイは、
ポチに

シルフィイ

「こいつの名前は、
スコール＝クールアイ。
この研究所の所長にして
元傭兵もとようへいよ…

こう見えても、かつては
サイレントキルの一つ名を持つ凄腕すさまじわざの
エージェント

だったのよ。」

黒衣の青年の説明をして

それを聞いたポチが、

「…こんなに綺麗きれいな顔をしてるのに…」

…と、驚いていると

シルフィイが

「 そうかもね。 」

…と、

その言葉を始めて、

「 だけど… スコールは、
幼いころ… 」

戦争に、ご両親が

巻き込まれたせいで、

小さい時から

ご両親とかがいなかつたし…
紛争が

続いていた

その国で育つたと

聞いてるから…

どんなに綺麗な姿をしていても…

子供のころは、

それに関わつて

生きるしか道が

無かつたのよ…。」

こう見えて、背中には

たくさんの傷があるのよ

…と、

クールアイが傭兵になつた経緯を、
いきさつ

ポチに話して

その事情を

理解したポチが、木箱を

両手に抱えたまま

「だけど……そうなると…
どうして、
傭兵を辞めて、
ここに所長になつたのか
不思議に思えて
くるんだけど……」

そう呟すと…

シルフィイが
「うぐ……そ……それは……」

言つこいくぞうにしている
ところに……

クールアイ

「それは……オレが
シルフィイたんに出会つて
しまつたからだ……」

クールアイが、
突然話に
割りこんできて…

クールアイ
「もともとは、
エージェントとして、
当時ある組織そしゆから、狙ねらわれていた…

雪音フワリを

護衛する

任務だったのだが…

護衛してるうちにオレは、

雪音フワリが…

オレのシルフィーたんに
変わる現場を

見てしまったんだ。

そして、それを見た

オレの身体に

電気が走った…!!

そして、

「気づいたんだ…」

その話を

木箱を抱えながら
聞いていた、ポチが

「何に、
気づいたんですか？」

そう…聞いてくるので

クールアイは、胸の前で

ネコミミのついた

ヘアバンドを

右手でギュッと

握りしめながら

「ああ…きつと…オレは

彼女を研究するためには
生まれてきたのだと……

そこまで言つたあと……

シルフィ

「待て……

途中からの話がおかしく
なつてないか……」

……などと言つ、

シルフィの言葉は、
聞いておらず……

わざと……

クールアイ

「そして、それから

オレは、ミコーズの

調査

レポートなる、

でつち上げの

申請書をオレの

所属していた組織に

提出し……

それで、それが見事
上層部の認可をうけて
ここに派遣

された……という訳だ。」

ネコミミのついた

ヘアバンドを近くにある
机に置きながらそつ話す…クールアイに

シルフィイは、左の方の
眉を

ピク、ピクッ…と、

動かしながら、

「待て。

おかしいだろ…

いろいろと…・・・

第一…なんで?それで、
所長になれるのよ…と、

クールアイに聞くと

クールアイ

「それは、キミを

狙つた組織を

潰したから、

そのボーナスってとこでいいだらう…・・・。

辞表を出したのこ、

いまだに組織から

呼び出しをされるといふをみると…・・・。

この所長といふ地位は、オレを辞めさせないためのものだらうな

…

そうなつた

裏の事情を話し…・・・。

シルフィイの

「良くそれで…

「この学院の方にも
通つたわね…。」

…と言つ話には、

クールアイ

「そこら辺の『ごまかし』は
スレイブあたりに
任せた。」

クールアイが、
そう答えるので

シルフィイ

「スレイブさん…つて…
確か、いつも、あなたの
尻拭いを

させられてる人だよね」

そう言って、

可愛いそう

可哀想に

…とシルフィイが、

同情すると…

クールアイも、それに

どうやるか
同調する

ようにな…。

「ああ…

いつも人の尻拭いを
させられて…大変だな…
あいつも…・・・」

そう言つので…

シルフィイは

「いや…主な
原因是、たぶん、
あなたですか…・・・
…と、

そう言わずに、
いられなかつた…・・・。

そのあと、

思い出したよ、
ポチが

「でも、シルフィイのために、所属していた組織を

辞めようとしたなんて…
凄い覚悟

だつたんですね…・・・。」

その事について話すと…

「クールアイは、
「結局

辞めなかつたけどな「

…と、そう言って、
移動しながら…

「大した事じやないわ…

ただオレは、仕事より、
任務にんむより、

世界より…

守りたい大切な女が…
できただけだ…。」

そう言つと…・・・

シルフィイが

「言いたい事は、
わかつたが、
人の胸に頭を
押しつけなければ
言えない事なのか?
それは…・・・。」

そう言つので、

クールアイ

「なら、

グリグリするぜ…！」

両足の膝ひざを

ついたクールアイが、

頭をグリグリ横に
ふ
振りながら…

シルフィイの胸に

やぐに頭を押して、

「するなああ——！——！」

叫び声を
あげるのだった。

そのあと：クールアイは立ちあがつて・・・

いつたん、シルフィーから
離れたものの…

まだまだ、彼の
暴走は止まらず

シルフィイの目の前で・・

クールアイ

「そして元傭兵のオレは、今までシルフィーたんを守るために、いろんな事を

クールアイがふたたび

自分の事について話すと

シルフィイが

「組織を

辞めてないんだから…

現役の

傭兵なんじゃ…」

ないの?…と、話しても

クールアイは

「いいんだ…

なぜならば、その方が、
かつこいいからな…」

そう言つてきかず…

「さう?」、シルフィイが、

「いいのか?それで…」

…と、話しても…

クールアイは、

「そう…

いろんな事をしてきた

…と、

「雪うさぎで、

シルフィ

「聞けよ。人の話。」

「などと雪へ、

シルフィの話など…

まったく聞かずに、
自分の話を進め

クールアイ

「ときどき、

雪うさぎの家から
流れてくる・・

シルフィたんの声を
聞こえるようにしたり

シルフィ

「それは、
世間では、
盗聴と

いづ…。」

クールアイ
「雪うさぎが

シルフィイたんの姿に

変わった時は、

傭兵のスキルを

生かして、

こつそり…^{あと}後を

尾行

してみたり…

シルフィイ

「それを、世間では、
ストーカーと言つ…。」

クールアイ

「彼女の魅力を
広めるために、

生徒達に

シルフィイたんと
遊ぶよう^{すす}に勧め
たりもした…」

シルフィイ

「あれの原因は、
お前かあーー！」

…などと、

話を続けていふひかり

シルフィイが

「だいたい、なんで、
あたしなのよ！ほかにも
フワリとか鈴鹿とかが
いぬじやなこ…」

そう話すと…

クールアイは、

「いや…キミじやなれや
ダメなんだ…」

そういつたあと、

さらり

「雪つわわや天女の子は
心の光が強すぎて、
眩しそぎる…。
だから、オレには、
ミコーズといつ
存在なに、
どこか弱さを抱えた
キミの方に
惹かれるんだと思つ。」

そう話すと…

シルフィイは、

「そうか…

あんたの気持ちは、
良くわかつた…」

そう言ったあとで…

両膝を

ついたクールアイに

シルフィイ

「けど、子供の胸に、
また頭を、うずめる必要がどこにある…」
…と、話すと

クールアイ

「気持ち良くないか?
…と、

クールアイが言うの

シルフィイ

「気持ち悪いわ…！」

シルフィイが
自分の気持ちを正直に
伝えると…・・・

クールアイ

「 うなつたら、頭を
ドリルのように
回転させてやる……」

両足の膝ひざを
地につけた、
クールアイが
また頭を何度も横に振りながら、

シルフィの胸に、
グリグリ頭を
押しつけてくるので…

シルフィは、

「だから…
するんじゃねー！！」

…ってか、
ドリルつて…なんだよー?…と叫ぶのだった…。

そんな、
二人のやりとりが
続いているうちに…

今まで、ずっと…
中に妖精を入れた木箱を
両手で抱えていたポチが

「あの・・・
そろそろ箱持つのが
疲れて
きたんですけど・・・」

一人の話に口をはさむと

クールアイが

「むつ・・・そつか・・・
もう一人いたんだな・・・」

ようやくポチが
気になつたようなので・・・

そこで、ポチは

「ジパング語
うまいですねー・・・。」

第一声をかけるのだった・・・。

【Bパートへ続く】

第6話【サイレントキル】Bパート

心靈科学研究所

第2実験室

両手で木箱を抱えた…
コボルトのポチは、

頭部の左側の髪を
青いリボンでテールを
作った少女、シルフィイと

黒衣の服に身を包んだ、
長身の青年である
クールアイと一緒に

午前中なのにつす暗い
その実験室の中に、
立っていた…。

そんな中…

白いジャージを着た
ポチが箱を抱えながら
クールアイの方を見て、

（傭兵としても…
ポチ

所長としても、
すいぶん若いな…）

そう想つてゐると…

クールアイ

「お前が雪つわせが
さがして、いたところ
コボルトか…
しかし、コメは、
渡さんぞ。」

クールアイが
そう言つてゐたので…

そのとなりで立つて、いた

シルフイが
「いや…あなた、
いろいろと使つて言葉を
間違つてますから…」

この場合は、娘は、渡さんでしょ
う…と、言つてこぬつて、

クールアイは、
両足のヒザをついて、
両腕で、

シルフイの身体を背後から抱きしめながら…

「まあ、やつこつな…

ヨイデハナイカ、
ヨイデハナイカ。
』

…と、呟つので、
シルフィは、ジタバタと
もがきながら…

「ええい！

寄るな！触れるな！

あつちいけ！…

見事な

言葉の三段活用を使って
その場から、
離れようとすると…

ポチも

「シルフィも本氣で
嫌がつてるようなんで、
そろそろ離して
あげてください…。」

そう言つので、

クールアイは、

シルフィの身体にまわした両手を離して、
立ち上がり

クールアイ

「まあ、そういうな…

これは、

オレとシルフィイたんの
恒例の行事という奴だ。」

…と、ポチに言つと…

シルフィイは、
閉じた両手の
左側の眉をピクピク
動かしながら

「初耳だな…
いつの間に、そんな行事が出来たんだ？」

そう言つので、

それに対して
クールアイが

「ついさっき。…つうか
シルフィイたんは、
オレの嫁。」

そう言え…

両手を開けたシルフィイも

「待て、さつき…
何か、ボソッと、
とんでもない事を
つぶやいて

なかつたか?「

そう返すのだった…。

それから、
クールアイは、

「今まで、箱を
持つてゐるつもりだ?」

ポチ
「あつ、すすいません」

木箱を足元の方に置く
ポチの方を見て…

クールアイ

「あんな長い時間、
持ち続けていたら、
疲れるだろうに…」

ボソッと、

つぶやいていたので…

シルフィ

「誰のせいだと
思つてゐる!」

…と、シルフィが言つて

クールアイ

「オレ達」

そう言って、
シルフィの方を見るので

シルフィは、

（あー！殴りてえ、
こいつ…）

…と、

頭の中で思いながら、
顔の前で…

左手をギュッと
握りしめるのだった…。

そのあと、シルフィは、
クールアイの方を見て

シルフィ

「あんた…胸のどこか…
ケガしてるんじゃない？」

…と、クールアイに
聞いてきたので、

クールアイ

「ああ、前の戦いの時に…盾にしてた死体の身体から弾が貫通して
…。

至近距離から

銃を撃たれたからな…

でも、良く気づいたな」

そつ言つて、
驚おどろいていると

シルフィ

「あんたの腕あばの中で、
暴あはれた時に…」

顔には、

出さなかつたようだけど
そんな感じがしてね…」

やつ言つて、

シルフィは

「ちよつと、そのまま、
立つてなさい。」

そつ言いながら、

クールアイのお腹の前に
左の手のひらを向けて…

シルフィ

「我、

オリエンス＝シルフィードは、
癒しの風ラフィエルの名を借りて
ささやかな、風を起こす
吹け風よ。

ハーブウイングー。」

エレメンタルソングと
呼ばれる聞いた事のない
言葉を発音しながら、

左の手の平から、
黄緑に光る風を放出する

すると…その光の風は、
クールアイの身体全体を

小さな竜巻のような
螺旋の風となつて
包み込む…

少し時間が経たつて
その身体を包み込む
小さな竜巻がおさまると
クールアイは、

「あらがとう…」

…と、礼を言つたあと…

クールアイ

「でも…

まわりの紙は、出来れば
散らかさないで
欲しかつたな…」

シルフィ

「「」め～ん。」

両手を合わせる
シルフィイを前に…

実験室の中についた…
いくつかの紙が
癒しの風に巻き込まれて
飛んでしまった事に
嘆くのだった。

そのあと…シルフィイと、
クールアイは、
風で散らかった紙を…

ポチ

「あつ！

オレも手伝うよ。」

箱を置いたポチを加えて
かたづけると…

そのあと…・・・

クールアイは、

木箱の置いてある方に
行つてから…

両手で木箱のフタを

開けて

その中から…眠っている
蝶のよみうな羽がついた
紅い髪の妖精を
両手ですくいとつて、

クールアイ

「ふーむ…
相^{あいか}変わらず、

いい仕事して^るな。」

クールアイが
そう言^うので…

シルフィイが、
「ホントに、その器で
良かつたの？」

その事について聞くと
クールアイは、

「もちろん…

MOEドールほどじゃない

けど…・

妖精タイプもけつこう
需要^{じゅうつ}が

多いんだ…。」

そう答え…

それを聞いたシルフィイが

「ふーん…

じゃあ、悪いけど、
いつも通り…お願ひね」

そう言つと…

クールアイが

「今日は、いつもの半分
で、いいんだよな…。」

…と、

言つてきたので、

シルフィ

「うん。そうね…

その変わり…」

シルフィイが、

そこまで言つと…

クールアイが

「分かっているから…
心配するな…。」

そう言い残して…

両手で、すくいとつた
妖精をフタのあいた
木箱に戻すと…

奥の方に何かを

取りにいき…

そして… そのすぐあと…

クールアイは、
大きな封筒ふうとう、
を、何かの小切手の
ようなものと一緒に
持ってきて…

まずシルフィに…

クールアイ
「本当に今月は、
これだけで
間に合うのか？」

…と、聞きながら、

シルフィ

「うん。

先月の残りも少しだけ、
残つてゐるし…」

そうシルフィが
答えたあとで…

クールアイ
「やうか…」

…と、クールアイは、
大きな封筒と一緒に
持っていた

小切手のようなものを

シルフィイの左手に
手渡し…

そのあと…

ポチの方に行つて

クールアイ

「ほら、これは、
キミのぶんだ…。」

そう言って、

大きな封筒のようなものをポチの両手に手渡すと…

ポチ

「これは？」

と封筒を両手に持つて
尋ねるポチに…

クールアイ

「ヘルメス学院に
入学するためには
必要なものだ…。
詳しくは、

シルフィイたんに

聞けばいい…。」

クールアイは、そう話し

ポチ

「？？？は？」

突然の話で

クールアイの話の内容が
わからない…。ポチに

シルフィ

「じゃあ、

帰るわよ、ポチ。」

左手に小切手のようなものを持ったシルフィが
声をかけて…

「あつ…いや…ああ…
わかつた…。」

ポチが、

それに同意すると…

クールアイ

「では、
名残惜しいが…

さらばだ、

シルフィたん。」

シルフィ

「ええい！！だから、
抱きつくなー！」

クールアイの腕の中で、
シルフィが
ジタバタしたあと…

シルフィとポチは、
第2実験室を
後にするのだつた…。

そして…それから、
心靈科学研究所を
あとにして…
ヘルメス学院から
出たポチは、

「それが生活費に
なるのか？」

シルフィが左手に持つた
小切手のような紙に
ついて、聞いてみると…

「そうね…

スコール達の組織は、
私から買い取つた
いろんなタイプの
ホムンクルスを、

売つて……資金調達を
してゐるようだから……。」

シルフィイがそう
言つたが……

ポチは、

「だけどさ……
ペットみたいに
すぐ捨てられるような
人間に、それを
売つたりしたら……」

その事が心配すると……

シルフィイ

「大丈夫よ。」

……と、

シルフィイが、

「そこら辺の心配が
ないから……あたしも、
彼らに協力して
もらつてる訳だし……」

そう話すところから……

ポチは、

シルフィイが

クールアイ達の組織を
信用している事がわかり
ほっとすると…

そのあと、すぐに
隣で歩いてるシルフィーに

ポチ

「じゃあさ、本題に
移るけど…」
「これ何?」

歩きながら…

両手に持った封筒を
シルフィーの前に出すと…

シルフィーは、

「ヘルメス学院に
転入するためには必要な
書類よ。」

ポチに、その封筒の
中身について話し

それを聞いたポチが

「そんな事…
オレ、一言も頼んでは…」

右手に封筒を持ち変えて
そのあとを言おうと

すると・・・その前に

シルフィ

「でも、ジパングで
何かしたいと思うなら…
まずは、そこに
行つた方がいいわ…。
…とは、言つても
転入試験があるから…
それに受かつたら…って
話だけど…。」

シルフィがそう言つので

ポチは、歩きながら…

「試験?」

その言葉をくり返すと…

シルフィ

「そう…試験で、
ある程度良い成績を
とらなければいけないんだけど…
まあ、どんな問題が
出るか、
だいたい把握はあく
してあるから心配ないけど
試験対策は、一応
やらないと…」

シルフィイが顎に
右の人差し指を
つけながら、
そつ話すので…

その隣を歩きながら
ポチが
「だから勝手に話を…」

進めるなよ…と、
言おうとした時…

シルフィイは、顎から
右手を離して

シルフィイ
「だけど面接用に
制服とか買わないと…
服は、あたしが
見立てるから…
一緒に買いに
行きましょ。」

ポチ

「あつ…おー。」

その右手で

ポチの白いジャージの
左の袖を

引っ張つて、
先を急ぐのだつた……。

【第7話へ続く・・・】

第6話【サイレントキル】Bパート（後書き）

次回予告

道路の歩道の上で、

右脇の方に

大きな封筒と

置んだ服の

入った紙袋を

抱えたポチと…

白いワンピースの
ポケットの中に
お札と小銭を入れたシルフィイが一緒に
歩いていた…。

その途中でポチが

「なあ、

いくら何でも

茶色い制服は、

ないんじゃないかな？」

…と、隣を歩く
シルフィイに聞くと…

頭の左側の銀の髪を
青いリボンで結んで

テールを作った
シルフィイは、

「いいのよ。
茶色い制服だから…
チャクランよ。
面接とかに印象的
じゃない？」

青い靴で歩きながら
ポチを見上げるので…

白いジャージを着た
ポチは、

「そうなのか？
オレ、学校については、
良く知らないけど…
何となく違う気が
するぞ…」

歩きながらシルフィイに
言つと…

シルフィイは、

「そうかな…」…と、

頸の方に一度

左手の人差し指の指先を

近づけてから…

すぐに、その左の人差し指を
顎から離して…

シルフィ

「まあ、
買つてしまつたものは、
しうがないじゃない」

試験の日は、
チャクランを着て
茶色い靴を履いて
いくわよ。…と、
シルフィが歩きながら
言つので…

ポチは、犬のような口を
あけて…
ハア～と、
ため息を吐いて

そのあと、シルフィに

ポチ

「じゃあ、
ヘルメス学院について…
聞いていいか？」

そう言つて、

話題を変えると…

シルフィイは、
ポチの隣を歩きながら…

「いいわよ…。」「…
と、ポチに
ヘルメス学院の事を
話し始めた…。」

シルフィイ

「ヘルメス学院は、
エリート科と普通科の
二つの科に分けられていて…
ポチが試験で受ける
普通科が、

年齢制限なしの
50名定員なのに對し、
エリート科は、
小学生の頃から、
現役の児童達が
受けなければならず…
定員も7名のみと、
かなり厳しい条件に
なっているわ…。」

そんなシルフィイの話に
ポチは、

「なんでエリート科は、

そんなに厳しいんだ?」

その事について聞くと…

シルフィ

「それはね…

エリート科の卒業生には
ジパングでの

国家鍊金術師の

試験資格が与えられる
からよ…。」

他にも、有名魔術学校へ
転入できたり、

魔術に関わる仕事に
就職するのに

有利になつたり…

いろいろ特典は、あるが
やはり、エリート科に
入らせようとする児童の
親御さんの目的は

ほとんど、それらしい…

シルフィ

「おかげで今年

普通科を受けた人達の
ほとんどが他の学校の
滑り止めだつた

のに対して…

エリート科は、

受けたのが、幼児だけ
だつたのにも関わらず
募集定員の
72倍の倍率だつたつて
聞いてるわ…。」

シルフィイが、
そう話すので…

ポチ
「すごいな、
エリート科は…」

もし受けるのが
こっちの方の科だつたら
とっくにあきらめてるな
…と歩きながら
考えていると…

そんなポチの考えを
読んだのか…

シルフィイ

「でも、まあ…
あなたの受ける普通科は
今年は、0・75倍しか
なかつたと聞いてるし…
生徒の半分くらいが
あなたと同じ亜人種や
大人だつたそつだから…

勉強さえしつかり
出来てれば必ず
受かるわ。」

そつとつて…ポチを
安心させたシルフィイは、

シルフィイ
「それに…あたしは、
できればポチに…
学校に入つて、
学生生活を楽しんできて
ほしけな…。」

そつとつて…思ひ事を話して…

ポチ
「自分も
学生だからか？」

…と、ポチが話すと、

シルフィイは、

「ん。正確には、
フワリがなんだけどね」

あたしは、あくまで
フワリの前世よ…と、
ポチに言つたあと…。

シルフィ

「あつ！家が
見えてきたわ…。
早く帰りましょ。」

そう言つて、

歩く足を速めて

ポチの先を歩くので…

ポチは、

「えつ…あつ…いや…」

…と、

少しどとぼどこながらも、

封筒や紙袋を

右腕や右手を使って

抱えながら…

シルフィのあとを

追うのだった…。

次回

第7話【ヘルメス学院】
お楽しみに～

最終話【ヘルメス学院】Aパート

夜。電気がついた

フワリの家の
一部屋で…

白いジャージを着た

ポチが

机の前の椅子に座つて…

机の上でノートを開いて
一人、勉強していた…。

そんな中…

コンコン…と、

部屋のドアを叩く音がして…

ポチが動かしていた…

右手に持つた鉛筆を止めて…

「はい。」

…と、答えると…

???

「はい
入るわよ。」

ミルクティーを

入れた皿をのせた

お盆を

両手に持つたシルフィイが
ガチャツと…部屋の中に
はい入つてくる…。

その時、

椅子に座つたまま
うしろを向いたポチが

「あれから…。
毎晩ご苦労様だな…
自分達の仕事もあるのに
大丈夫なのか?」

…と、

シルフィイに声をかけると

シルフィイ

「大丈夫よ。

それに、あなたに学院の
転入試験をしろと…

言つたのは、あたしだし
そう言つたぶんの責任が
あるわ…。」

シルフィイがそう言つので

ポチは…。

「そつか…。

じゃあ、オレが

質問ばかりして…

ずっと…ドアの前に、
立たせてるのも悪いから
早く、ここに来て
勉強を教えてくれ…。」

シルフィ

「うん。わかった…。」

シルフィと、

そんなやりとりを
しながらも…頭の中で

ポチ

(でも…少し
がんばりすぎな
気がするな…
無理して、風邪とか
ひかなきや、いいけど)

そう思いながら、
顔を机の方に戻し…

鉛筆を持つた右手を
動かすと…

机の方に意識を向けるが…

そんなポチの心配は…

数日後、現実のものとなる…。

夕方～フワリの白い部屋……

電気がついた、

この部屋のベッドの上の
白い布団の中で……

？？？

「うう……

こまつ、こまつ……

シルフィイが寝ていた……。

その枕の横では、

そこに椅子を持ってきた

ポチが……

持つててきた椅子に
座つて……

「だから、無理するな
と言つたのに……

……と、ぼやいたあとで
一度、ハアー……と、
ため息を吐く……。

すると……シルフィイは、

「うめん。

長いあいだ、

フワリの身体を

借りてたものだから…

つい…体調の変化に

気づかなくて…」

そう言つので、ポチは、

「だから…・・・

風邪で寝込んでも、
ずっと…自分の人格で
いる訳なんだな…。」

…と、病気になつても、
フワリの人格にならない
理由を知ると…

シルフィイも当然でしょ

…と、ばかりに

「だつて、あたしの
やつた事が原因で、
こうなつたんだもの…
だから、この風邪は、
責任をもつて、
あたしが対処するわ。」

そう答えるので…
ポチは、

「まあ、そつしたいなら
すればいいさ…

オレも

シルフィイの立場なら
同じ事を

考えただろうし…。」

そう言いながら、

頭の中で…

（たぶん、フワリも
そんなシルフィイの考えを
理解しているから…
何も
言わないんだろうな…）

まだ、小さいのに…
他の人格の事を
よく理解してるな…と、
感心するのだった。

それから、ポチは、
シルフィイが、ずっと…
布団の中に身体を
寝かせたまま
話しているので…

ポチ

（そろそろ部屋を
出よひかな…・・・）

…と、考へてことと、

そこへ、シルフィイが

「でも、情けないわ…」

ちくみへづ
てづみへづ

そう言つて、いたので、
氣になつて…

ポチ

「どうした？」

なるべく

優しい口調にして、
そう話すと…・・・

それで氣を許したのか…

シルフィイが、

「明後日が

ポチの試験日なのに…」

…と、くやしそうに
話すので…

ポチは、そう話す
シルフィイの顔を見て、

「泣いてんのか？お前」

つい…その事に口が
いつてしまつと…・・・

シルフィイは、布団から、
バツ・と、上半身を
起こして…

ジワツと紫色の両面たておもて
溜たまつた涙を…

着てゐる黄緑の
パジャマの左腕で、
「シ「シ」すつたあとで

シルフィイ

「違うわ。

これは、水滴が田の方に
落ちてきたのよ。」

そうポチに話すが…

さすがに、これには、
ポチも…

「す…水滴つて…」

(天井にも屋根裏にも
穴は、あいてないし…
第一、今日は、

雨が降つてないのに……（

すんなり納得して、
いいものか、どうか…
考えていたが…

その時……

ポチの考へてる事に
気づいて…

シルフィ

「な……何よ……」

頬を薄い紅色に染めるシルフィの

ある部分に目がいき

ポチ

「そついいえば、今日は、
髪……伸ばしたままなんだな……。」

頭の左側の銀髪を

いつものように、元

リボンで

結んでない事を

指摘すると…

シルフィ

「当たり前じやない！」

いくら今の姿が幻でも、
風邪をひいたら、
リボンは、取るわよ。」

まあ、正確には…
取った姿になつたんだけどね…と
シルフィが話すので、

ポチは、
「そうか…」

…と、犬のような口で
バウバウッ…と笑つて、

そんなポチを見て…

シルフィ
「ひらー、笑うな！」

そう言つたあとで、

両手で持ち上げた布団で
恥ずかしそうに…

口元を隠す、シルフィに

椅子から立ち上がりつて、
ポチは…

「じゃあ、オレ…
お粥かゆでも

作ってくれるよ。」

そりゃついて

部屋のドアに向かつて
歩くので…

ベッドから、上半身だけ
身体を起こしていた
シルフィイも、

「ちよつ…ちよつと

待つてよ。

お粥くらい、

今あたしでも…」

両手にもつっていた
布団を取つて、
ベッドから離れようと
するが…

立ち上がつて、
数歩を歩いた時に

シルフィイ
「きやー！」

またマンガで見るような

左足が膝から
曲がつて…

背伸びするよつと
両手を伸ばした
見事なコケ方かたを
していた…。

一方いっぽう

ドアを開けようと
していたポチは…

シルフィイがコケた時の
音を聞いて

うじりを振り向くと

なんと、シルフィイが
うつ伏せぶせに
倒れていたので、

シルフィイのところに
行って

両手を使って
助け起こし…

シルフィイの首のうじりと
両足の膝の方に

両手をかけて抱えるが…

それから…ベッドの上に
シルフィイの身体を乗せる
までのあいだに

シルフィイが…

（む…胸がドキドキする
あー！もう！
静まれってば！）

頭の中で

そんな事を考えながら…
恥ずかしそうに
ポチの方を見るので

気になつてポチが
シルフィイの方に視線を
向けると…

シルフィイは…サッと、
視線を合わせないよつに
顔を横に向け、

ポチが視線を
ベッドの方に戻すと、

またシルフィイが
チラッと、ポチを

見ていくよつなので…

ポチがシルフィの方に
視線を向けると、
またサツと顔を横に向けるので

ポチ

(やれやれ……)

…と、ポチは、
シルフィをベッドの上に
寝かせるのだった。

そのあと…

布団をかぶつた
シルフィは、

「でもポチは、
コボルトで…手足の爪が
犬の方に近いから…・
料理とか…作りづらいん
じゃないの？」

そうポチに話すと…

ポチ

「いや…大丈夫だろ。
いつもシルフィが
作るのを見てるし…」

そうポチが言うのを聞いて…

シルフィイは、

「なつ・・・」

恥ずかしそうに
頬を薄い紅色に染めて

それからポチに

シルフィイ

「い…いいわ。

そこまで言うのなら…
大人しく待ってる…。」

…と、話すのだが…。

ポチ

「分かった。

けど…どうしてこっちを見ないんだ?」

シルフィイ

「か…風邪がポチに、
うつると困るからよ。」

…と、シルフィイは、

ポチの方へ背中を向けて

ポチが部屋を出るまで

なぜか？ずっと…

横向きに寝ていた…。

しかし…

ポチが部屋から出たあと

シルフィ

（な…なんだろ。

なんとなく…いや…な
予感がするんだけど…）

そして、そのあと…

シルフィの不安は、
現実のものとなる…。

それから…少し

時間が経つと

お粥の入った
大きなお椀を、
乗せたお盆を…

ポチが両手に持つて

部屋の中に入つて來たので…

シルフィは、

ベッドから起きて

それから…

ポチが正座している

テーブルの向かいの場所で正座をすると…

シルフィ

「いただきます。」

…と、自分の前に出されたお椀の中のお粥を

左手に持つた
スプーンのようなもので
すくいとり…。
それをパクッと、
口の中に入れたら。

しかし…。

それを口に入れた
途端
シルフィイの体温が
一気に下降し…

シルフィイ

（な…何これ…。
なんで、こんなにお粥が
ます
不味いの…。）

なんとか…その一口を
モグモグ…と食べ終わり

もう一口
食べる時

シルフィ

（分かつてゐる。ポチ…
料理が不味くて
許されるのは、
子供の時だけなのよ。）

そんな事を思いながらも

それから2度3度…
左手に持つたスプーンを
口に、はこんでいると…

正座から

あぐらに変えたポチは、

シルフィイが

顔に何本も線がはいつた
ような表情をしながら…

滝のように、ダラダラ汗を
流している事に気づき…

ポチ

「どうした？ もしかして
不味かつたか？」

…と、声をかけてきたので…

シルフィイは、一度

口に、はじぶ手を止めて

(ど…どうじよお~

素直に不味いって言えれば

いいかも知れないけど…

せっかく、あたしのために作ってくれたんだから…

それは、冷たいと思うし

う~ん…ここはまず…)

シルフィ

「イマイチね…。
これから、あたしが
あんたでも作れるような
料理を教えるから…
試験が終わったら、
一緒に作るわよ。」

そう言いながら頭の中で

シルフィ

（それで、いいわね。
フワリ・・・）

また、たまに
あんたの身体を借りるわよ…と、
フワリに呼びかけ

それにフワリが

「う~ん…
いいよ。
ボチも

…と叫びたるようだし)

・・・と、答えたので、

シルフィ

(分かつたわ…。)

・・・と、シルフィは、
また左手を使って…
お粥を全部、
食べきるのだった…。

しかし、そんな無理が
たたつてか…。
シルフィは、お粥を
食べ終わると…すぐに
テーブルを離れ

ポチに…。

「もう、あたしの事は、
いいから…。
あんたは、明後日の
試験の事を考えなさい」

そう言って

ベッドの上で横になると

「分かつた。」

ポチも

上に、お椀やスプーンを乗せた、お盆を持つて…

テーブルから立ち上がり

ドアの方まで行って部屋を出ようとするので

ドアノブが閉まる音が聞こえたシルフィは、

その方向に背中を向けたまま・・・

シルフィ

（これは、なんとしても明日までに風邪を治さないと

いけないわね。）

ダー…と、滝のような涙を流すのだった…。

・・・そして 試験当日

フワリの家の前で…

茶色い制服を着たボチは黒く大きなカバンを右手に持つて・・・

水色のワンピースのようなものを着たフワフワに見送っていた・・・。

フワリ

「こつてらつしゃい

そう言って、

左手を何度も横に振る
シルフィに

ポチ

「あつ……いや……ああ……
行つてへるよ。」

そう言って、

ポチは、背中を向ける

ポチ

（ふう……やつぱり少し
緊張してるな……でも……）

空を見上げる

白黒だつたはずのポチの
視界に一瞬、
青い色がかかる・・・。

カバンを右手に持つた

ポチが

うしろを振り向くと、

セレニティ・・・

背中のうしろの方で
両手を組んで、微笑む
フワリの姿があつた・・・。

目を閉じて

ほがらかに微笑む
フワリを見て

ポチは、

(セレニティ
ともじや、 いんなふうに
景色の色が感じられる
事があつた・・・

それは、 まさか・・・)

そり・・・ それは・・・
ポチが気づかないような
ささやかなものだが
確かにフワリの魔法だつたのだ・・・

ポチ

(ありがとうな
フワリ・・・)

頭の中で、 そり言つて
ポチは、 学院への道へと
身体を戻す・・・。

そして、ポチは、

学院へ向かう途中で

張りつめていた気持ちが

いつの間にか…少しだけ
和やわらいでいた事に気づくのだった…。

【Bパートへ続く…】

え~と、今回は、
シルフィイが身体を壊して
風邪をひいてしまう
話です。

なぜこんな話を
思いついたかと言つと
自分も風邪を
ひいたからです（笑）

お願ひですか…

前回みたいに癒しの風で
治せばいいだる…という
ツツ「ミは、無しに
してください（泣）

第一、部屋の中で使うと
ものが散らかるんですよ
あの魔法 『言い訳になつてねー』

最終話【ヘルメス学院】Bパート

夜。フワリの部屋。.

この時は、部屋の中に
電気がついてなくて…
月の光を頼りにしていた

そんな中、

茶色い制服を着たまま
あぐらをかいてる
コボルトのポチの

テーブル向かいで、
正座をする。

袖の大きい白い服の下に
赤い袴はがまのようなものをはいた
黒く長い髪の少女の姿が
あつた…。

その姿を見て、ポチが

「しかし、シルフィも
そうだけど…
みんな、
もみあげのところが
長いな。」

… と、やつらへば…

その背中ことじぐくよつな
長い髪をしたその少女
すずか
鈴鹿も

「やつじやな…
しかしな、ポチ殿。
おなじに対し
面と向かって、
そう話すのもどうかと
思ひや。」

…と返すので、ポチが

「つまふ? あつ…こや…
「めん…」

そつまつてゐるあいだに

鈴鹿は、自分の前の
テーブルの上に
置いてあつた

湯飲み椀を
わん

左手に…

底の方を右手に持つて

中のお茶を…すく
と、飲むと…

鈴鹿御前

「つむ。

良このお手前であつた……」

一人で満足して、
湯飲み椀をテーブルの上に置き

それからポチに……

鈴鹿御前

「それでポチ殿

試験の方は、

どうじやつた?」

今日やつてきた。

試験の事を聞いてきたので……

ポチは、試験の内容を

「あ……いや……そうだな……
最初は、性格診断から
始まつて……」

……と、

テーブルの向かいで
正座している鈴鹿に
話し始めた……。

ポチの話では……

性格診断の筆記が終わると…

一度、校舎の外に出て

まず懸垂か

腕立てふせの一いつのうち
どちらか選択したものを
選んで…

それをする必要がある
らしい・・・。

ポチ

「オレのような
亜人の場合・・・
懸垂なら7回以上…
腕立てなら40回以上が
合格ラインらしいんだけど…。」

もちろんポチは、

腕立てを49回して

これは、合格らしい…

ポチ

「次は、体力で

校庭を何周か、まわって

それを、

決められた一定の
時間内に走る事を

テストされたな……。」

これは、だいたい
2000メートルを
10分以内で走れれば…
まず合格らしい……。

ポチ

「その次は、
素早さを見るための
反復横どび…
これは、1分で20回以上
とぶ事が要求される。」

ちなみに、これは、
普通の人間なら…

15回以上で良いらしい…

そこまで聞いて、
鈴鹿は、

「ふむ。どうやらどれも
最低限の体力があれば…
合格できるものばかりじゃな…」

そう話をまとめると…
ポチは、

「まあ、そうだな…

次は、校舎の中に戻つて

筆記試験なんだけど……

……と、筆記試験について話しあじめ……

ポチ

「筆記は、一般教養と宗教について書くんだけど……宗教は、自分の信じているものから……得意なものまで……好きなものを選択できる……。」

そして、宗教の筆記は、問題を解く事より、むしろ感想を書く事が要求されるらしい……

ポチ

「筆記は、半分以上できればいいらしいんだけど……宗教で書いた答えが、どう点数に結びつくのかわからないから、予想できないんだよな」

ポチが、

そつ不安を口にすると…

鈴鹿御前

「まあ、そなたは、
真面目そうであるから…
心配ないじゃん。」

「そう言つたあと…

さうこそ、鈴鹿が

「それで…問題は、
それで終わりなのか？」

…と、聞いてきたので…

ポチは、

「いや…最後に
もうひとつ、運をはかる
テストがあつたな…」

鈴鹿御前

「運？」

…と、その言葉をくり返す鈴鹿に

ポチは、首を縦に振つて
「クリと頷き

「トランプや麻雀などを
使って…・・・
使って…・・・

一時間で、

どのくらい良い手を出せるか…を
ためすみたいだ。」

ちなみに…

大きな手をだせば
高い点数を取れるようだが…
普通は、出しやすい手を
何度もだして、点数を
積み重ねていくのが
良いらしい…。

ポチ

「まあ、オレは、
トランプの
ブラックジャックを
選んで…。
15から19あたりを何度も
出した…。」

ポチが、そう言つと…

鈴鹿は、口元に

左手の伸ばした4本の指の指先をそえて…
クスリと笑い

鈴鹿御前

「ブタを出さぬよう
配慮するあたりが
そなたらしいの…」

おかげで強い手も出せぬ

よつじやが…と、

鈴鹿は、

口元から左手を離し…

そのあと…・・・

鈴鹿は、テーブルから
立ち上がって…

「まあ良い。これで、
ポチ殿の試験の事は、
妾にも理解できた…。
どれ、それでは、妾が
でざあと…と申すもの
でも作ってきてやるわ」

だから待つておれ…と、

両手に持つた、
ポチの使った皿の上に
湯飲み椀をのせて

部屋を出るのだった…。

それから…何日か

田にちが過ぎて

夜。

青い月の光だけが照らす
フワリの家の居間で…

茶色い制服を着たポチが
テーブルの前で、
あぐらをかけて
座っていた…。

テーブルの上には…。
火がついた口ウソクを
上に乗せた

銀色の口ウソク台の他に
きんとき豆のチリソース煮や…
トルティヤのグラタンなどの、
さまざまな料理が…
それぞれの入れ物の中に
入れられて、
置かれていた。

そこに…「コップやら、

皿やら、湯飲み椀やら…

さまざま

飲み物を入れたものを
乗せたお盆を、

両手で持つた

鈴鹿がやつて来て

鈴鹿御前

「今宵は、

ポチ殿の合格祝いじや。
遠慮せず、たくさん
食べると良いぞ。」

お皿は、ポチの前に、
それ以外の入れ物は、
自分の前に置いて…

それからお盆は、
自分の席の右横の方に
置くと…

ポチのテーブルの
向かいに正座して、
座りこんだ。

それから…ポチは、
テーブルの上に並ぶ…
いろんな料理を見て

「これ全部、鈴鹿が…」

…と、白い服の下に
赤い袴をはいた鈴鹿に
聞くと…

もみあげの方の黒髪が

胸にとどくへへりこゑこ
鈴鹿は、

「いや…全部

シルフィイの料理じや。」

わらわ
妾は、料理を

はこんだだけじや…と、
ポチに話し…

ポチ

「つまふ？」

鈴鹿御前

「いやな…

和食なら妾にも
作れるのじやが…
ぱーていと申すものなら
異国の料理の方が
向いてると考えてな…
そこは、料理上手な
シルフィイに
頼んだのじや…。」

理由をポチに話すと、

それに対してポチが
答える前に…

シルフィイ

「そんな話は、あとでいいでしょ……。

今は、ポチの合格を祝つて、パーティーをはじめましょ。」

…と、鈴鹿の姿のままでシルフイが話すの…

鈴鹿とポチは、
いただきます…を
してから…
料理を食べはじめた。

それから何分か経つた、
食事中…

背中に、とどくくらい
髪の長い鈴鹿の姿のまま

鈴鹿とシルフイが…

鈴鹿御前

「しかし…

異国の料理というのも、
なかなかの美味じやのう
和食しか知らぬ妾にも
作れるじゃううか？」

シルフイ

「大丈夫よ。あたしは、料理に手間をかけるのが好きだけど…」

簡単な料理の作り方も知ってるから…あとで教えてあげるわ」

鈴鹿御前

「おお！
それは、ありがたい。
では、
あとで教えてもらひ事と
しようかの。」

それぞれの声に
切り替えながら
そんな話をしているうちに…

ポチは、

鈴鹿のテーブルの上に
並んでいる…
ブドウジュースと
日本茶と
キヤロットジュースの
3種類のジュースを見て

ポチ

「それぞれの性格が、
でてているな…」

どれが誰の飲み物なのか
わかるな…と、
ポチが考えている事に
気づいたのか・・・

鈴鹿が…

「妾は、本当は、
日本酒の方が
飲みたかつたんだがの」

そうポチに話せば・・・

シルフィも
鈴鹿の姿のままで

「あたしも本当は、
ブドウ酒が
飲みたかつたんだけど…
まあフワリの身体がまだ
子供のものだからね…」

お酒の方を飲まない
理由を話すと…

それを気にしたのか…

フワリ

「じめんね…鈴鹿ちゃん
シルフィちゃん…・・・」

今度は、フワリが…
鈴鹿の姿を借りて、
そつまづので

鈴鹿は、自分の声で、

「気にいたすな…。
いくら魔法使いでも
こればかりは、
どうしようも
ないから。」

…と、

話をまとめのだった。

そのあと…。

ポチと鈴鹿は、
テーブルの上の料理を

手にとった箸や

スプーンなどを使って
食べつくし…。

皿などの

料理の入れ物の中を、
ほとんど空に
すると…。

鈴鹿が自分の着ている

巫装束の
衣装を見て

「しかし…かつて自分の

着ていたものが

特殊な店にいかぬと

買えぬ。という

状況は、どうにか

ならぬものかの…。」

…と、つぶやくよう

に

そう話すので…。

シルフィイが

鈴鹿の姿を借りて

「何、

贅沢

言つてるのよ。

あたしが着ていたもの
なんて…もう存在すら、

してないんだから…

ガマンしなさい。」

凛とした声で

そう話すので…。

それまで話を聞いていた

ポチが…

「身体と同じように

服装とかも光を利用して

変えられない

ものなのか？」

…と、前に聞いた…
田に映る光を利用した
話をもつてくると…・・・

シルフィイは、
鈴鹿の姿のまま

「それは、出来るわよ。
出来るけど…
身につけているものを
見た目だけ、変えたつて
むな
虚しく
なるだけじゃない…。」

テーブルの前で
正座をしたまま…
そう話しつづけ

それを聞いて、ポチが

「でもシルフィイは、
自分の姿になると…
リボンの位置を
変えるよな…・・・
」

つこでにリボンの
大きさも…と、
リボンの事を
指摘すると…

鈴鹿は、頬を
うすべにいろ
薄紅色

に染めて…

「そ…それと、
服装の話は、別なの！」

…と、シルフィイの声で
話すのだった…。

そのあとも…シルフィイは
鈴鹿の姿のままで

「じゃあ、そろそろ…
食器を片づけましょう。
あと、食器が片づけたら
洗いものは、あたしが
やるから…。
ポチは、タオルを
濡らして、
テーブルの上を
拭いてね。」

お盆をテーブルの上に

置いたあと…

立ち上がりながら、
そつとつて

それに対して、ポチも

立ち上がって…

空になつた入れ物を
お盆の上に乗せながら…

「わかつた。」

…と、答えると…・・・

鈴鹿は、

空になつた入れ物を
全部、お盆の上に乗せて

そのお盆を両手に持つて
台所の方に歩くのだった。

そして… そのあと

鈴鹿の姿を借りた
シルフイが台所で
洗い終わつた食器を…
全部、片づけると…

鈴鹿は、そこから…
自分の意識に戻り

そのあと、一度
フワリの部屋に
立ち寄つてから…

ポチのいる…

居間の方へ戻つて

テーブルの前で、
正座しているポチに

鈴鹿御前

「ポチ殿…これから、
披露する舞は
妾からの贈り物じや。」

そう言つて…

左手を振る事で、

いつの間にか左手に
持つていた

赤色の扇子を

バツと開き

その開いた扇子を

ひらひらと、動かしながら…

テーブルの前で正座する

ポチの見ている前で…

舞い踊る・・・

それは、

居間の中にあるのを

配慮してか…

足の動きが少ない

静かな舞だったが・・・

少し時間が経つと

それを見ていた
ポチの白黒の視界が、
ねじれるように
グニャリと曲がり…

ポチは：

鈴鹿の紡ぎつむぎだす
幻想の世界へと
入つていった…。

ポチ

「こ…これは…」

縁の木や…

青や桃色などの…
色とりどりの花が広がる
その楽園で…。

ポチが見たものは、
コボルトになつてからの
白黒の視界では、無く…

過去、

人間だつた時に見た…

たくさんの
世界の色だった・・・。

ポチ

（色を

感じてるんじゃない…

今。オレは、本当に
世界の色を見ている…）

太陽であるレナスの光が

まわりの緑の木の
上の方から射し込む、
その世界で・・・

？？？

「ポチ！」

ポチを呼ぶ声が聞こえる

その声が聞こえた方へ
顔を向けると…

ポチ

「うおっ！」

白い服の下に
同じ色のスカートをはいた
フワリが歩いてくる…。

だがポチが驚いたのは、

そのフワリを

はさんで歩く、

二人の娘を見たからで…

フワリの両隣を歩く

二人は、どちらも…

150センチくらいの身長で…

90センチのフワリより
あきらかに高かつた…。

しかし…白黒世界と違う
色つきの世界とは、いえ
フワリ右隣を歩く娘は、

どう見ても…さつき、
現実の世界でも着ていた
巫装束の衣装を着た
鈴鹿に見えるし…

フワリの左隣を歩く娘は
緑色のブラジャーの
ような胸当ての下に…
白いミニスカートを
はいていた…が、

頭の左側の銀髪を

青いリボンで
まとめているところを見ると・・・その娘は、
シルフィイにしか
見えなかつた・・・。

それから・・・
横に並んで歩いてくる
その三人は、

ポチの3メートルくらい
手前で立ち止まる・・・

まず、鈴鹿らしき娘が
シルフィイらしき娘の方を
見て・・・

「しかし・・・
何度か見ているが
あいも変わらず
シルフィイの衣装は、
露出がすごいの。
さあびす、という奴か」

・・・と、声をかけると・・・

やはりシルフィイだった
サンダルをはいた、
その銀髪の娘は、

両腕で胸の方を隠しながら…

「し…仕方ないでしょ。
あたしが生きてた頃は、
この衣装いしょうが
普通ふつうだったんだもの…」

そう言ひうので…

今度は、現実世界と
同じように、
茶色い制服を着たボチが

「その両腕に書かれてる
緑色の紋様は、
なんなんだ？」

その事について
聞いてみる。

すると、現実世界より
少し大人になつた姿の
シルフィイは、

「ああ…精靈印の事ね。
昔、

連續して起こつた台風に
よる大災害があつてね…
それを当時の人々は、
精靈が怒つていると

思ったので…

精靈印を書いた、

あたしを

イケニエにして…

精靈の怒りを鎮めようと

したのよ。」

自分の両腕に
描かれた紋様の
事について話し

フワリの隣で、

その話を聞いていた

鈴鹿が

「なるほど…それで、

シルフィイをイケニエに

捧げた人々が…

犠牲になつた、そなたを

風の精靈の一部に

なつたのだと信じて、

時が経つにつれ…

いつの間にか、

そなた自身が風の精靈と

同一視されるようになつた訳じやな…」

そう話すと…・・・

その鈴鹿の予想が

当たつていたのか…

シルフィ

「まあ、

そんなところね…」

そう言って…シルフィも
頷くので、

その横で話を聞いていた
フワリが…

「イケニエかあ…
フワリには、出来ないな
だって…・・・死んだら
ボチに会えないもん…」

つぶやくようにな
そう話すと…

その隣で…シルフィは、
口元を左手で、ふさいで
クスクス笑つてから…

口元から左手を離し…

「まあ、いろんな
価値観があるという事よ
確かに、あの当時
あたしは、

イケニヒに選ばれて、

幸せだと思ったけど…

それは、あたしの考えで

あつて…

別に、あんたがあたしと
同じ考えになる

必要なんかないのよ。」

そう言つたあとで…・・・

シルフィ

「じゃあ、あたしの話は
これくらいで、
いいでしょ。」

…と、その話をまとめて

それからポチに、

「じゃあ、ポチ。

もうちょっと、下がつて
くれないかな…。」

…と、声をかけて

ポチ

「うお…いや…ああ…
わかった…。」

ポチが3歩くらい
うしろに下がつて…

シルフィイ、フワリ、
鈴鹿の三人から…ポチが
5メートルくらい
距離をとると…

鈴鹿、シルフィイ、
フワリの三人は…

左手を上方に伸ばして
広げた左の手の平を
空に向かつてかざすと…

その三人の
左の手の平の上に、突然
強い光が現れ…
その光と共に…
鈴鹿の上には、
銀色の扇子が…

シルフィイの上には、
金色の豎琴たてじと
が現れて…

フワリ
「フワリだけ…なんで

トライアングル?」

…などという

フワリの不満をよそに、

三人は、
一瞬の光と共に出現した
それらの道具を
その手にとると…

鈴鹿は、

左手を振る事で
その左手に持った扇子を
バツ^{ひづ}…と開いて

そのあと…・フワリに

「ところで…フワリは、
他の人格にも
呼びかけたのか?」

…と、聞いてきたので

フワリは、

右手でつまんだヒモに…
三角形の鉄の棒を
つり下げて…

左手で、それを鳴らす
鉄の棒を持ちながら…

「うふ。

呼んではみたけど…

鈴鹿ちやんと

シルフィイちゃんの他は、
どの人格も、まだ
ポチが会っていないし…

それで、

お祝いをするのは、
変だらうって事で…

やこまでも書つと…

鈴鹿も、

「つむ。確かに
会つてもいないのに…
いきなり、この世界で
姿を見せるといつのも
変な話だしの…」

そう言って、納得し…

それまで…フワリの隣で
二人の話を聞いていた
シルフィイが小さな豎琴を
右腕に抱えて

…と、呼びかけると、

「鈴鹿…」

鈴鹿は…

「うむ。 そうじゃな…」

…と、

フワリとシルフィの
前に出て…・・・

鈴鹿御前

「では、 ポチ殿…
これからが
眞の妾達の
贈り物じや。」

…と、 ポチに呼びかけ
シルフィの豎琴の音色と
共に…

開いた銀色の扇子を、
ひらひら動かしながら、
舞を舞い始めた…・・・。

それからといづもの…

シルフィが左手の指先で

右手に抱えた

豎琴の弦を弾いて
鮮やかな音色を
奏でれば…

鈴鹿が、

その音色に合わせて

ひらひらと扇子を動かし

舞い踊る…。

さらに…

それに合わせて

フワリが

右手につり下げた

三角形の鉄棒に、

左手に持つた

小さな鉄棒を打つて…

チーン…といふ音を、

何度も奏でながら…

歌を口ずさみ

その三人を

少し離れた場所で、

見ていたポチの胸に…

ポチ

（なんだろうな…この
あたたかい気持ちは…）

おだやかで、どこか
なつかしい…不思議な
気持ちが広がっていた…

そして…現実世界では…

茶色い制服を着たポチが
テーブルの近くで、
横になつて寝ていた…。

そこに…たたんである
大きなタオルを
両手に持つた
フワリが現れ…

しゃがんでから、
横になつてるポチに

両手に持つた
大きなタオルを
広げてから…かけると、

フワリは、
ポチの犬のような額に…
そくと…キスをして、

「お休みなさい…ポチ
いい夢を…」

寝ているポチに、
そう言つと…・・・

巫装束を着た

フワリは、立ち上がりつて

夜の居間を出るのだつた……。

【第7話】終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2575e/>

ミューズゼロ《読みにくい方はフレイムファンタジーを見て下さい》

2010年12月7日02時43分発行